

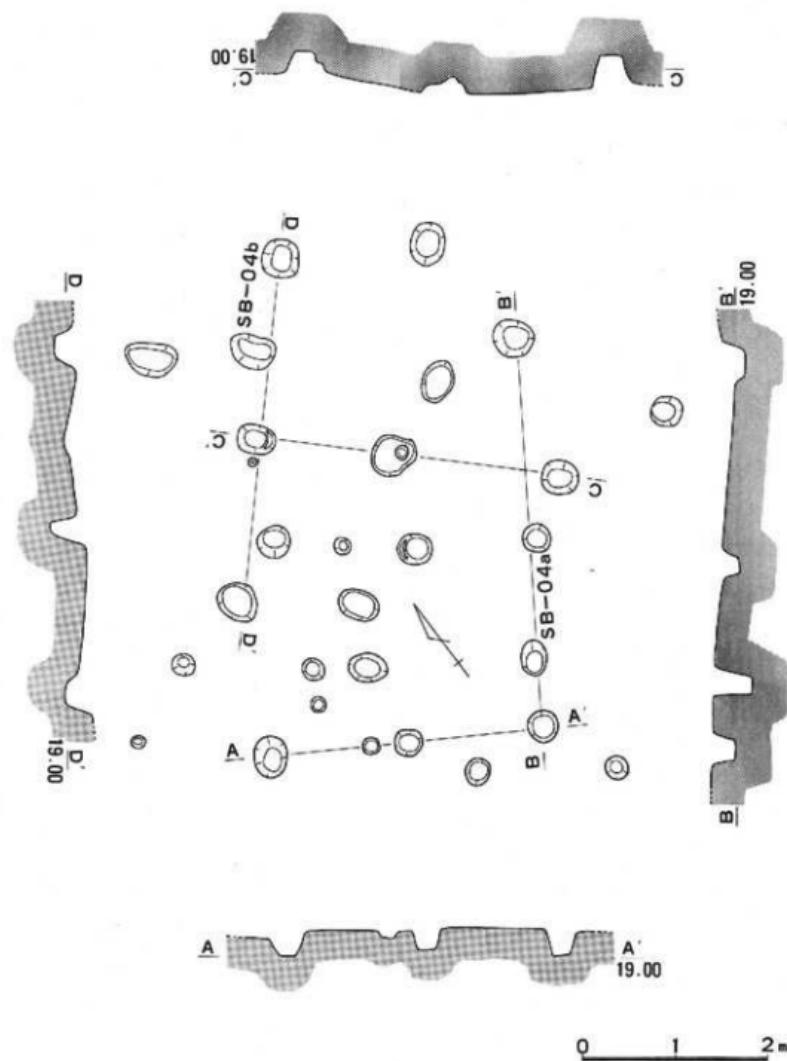
第27図 SB-01、02出土遺物実測図

なり緩やかな傾斜をつけて作られている。床面から大小様々なピット14個を検出したが、壁際の西端のものを除く4個が主柱穴に対応するものと思われる。当初壁際西端のピットもこれらと対応するものと思われたが、深さが14cmと浅く、また、柱穴間の距離が他のものよりやや長いため、主柱穴とするのは困難と思われ、現存では桁行3間の建物跡であった。柱穴は円形および楕円形を呈しており、長軸径で26~48cm、深さ34~50cmを測る。柱穴間の距離は1.5mと一定であった。また、床面の東端でL字状に曲がる溝の一部を検出したが、東端のピットと切り合い関係にあり、この溝の方が新しいものである。

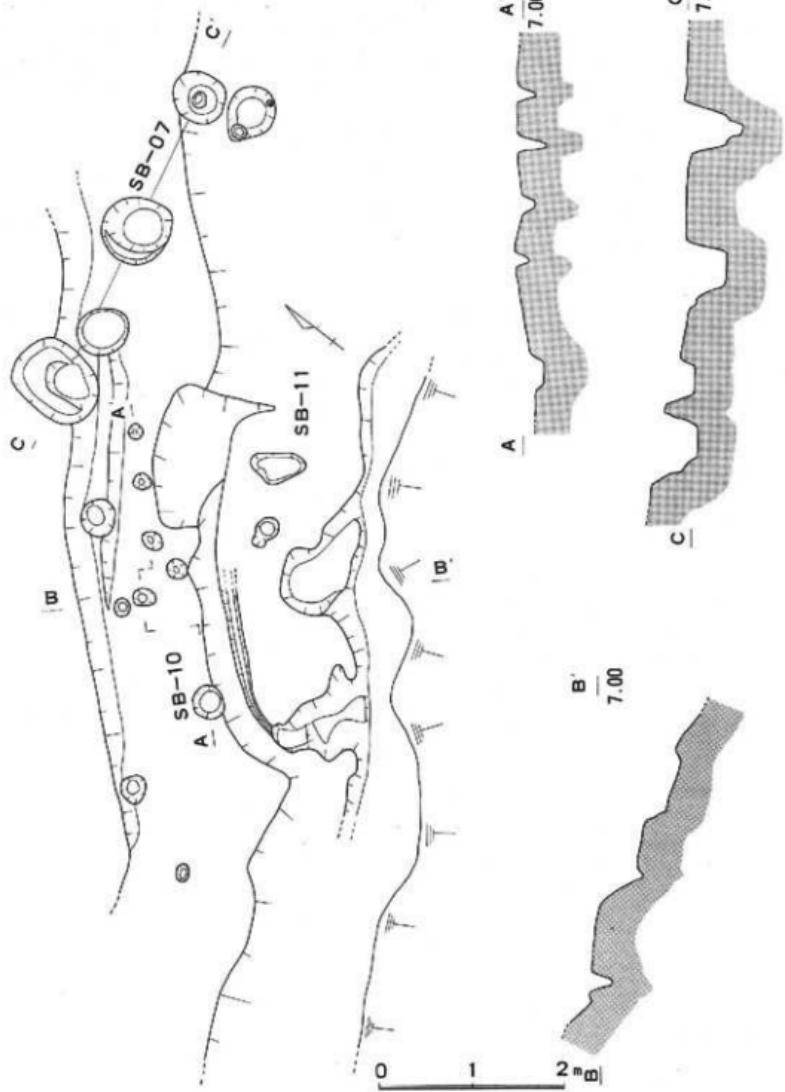
遺物は床面直上からは土馬が出土しているだけであったが、埋土中からは流れ込みの弥生土器と須恵器等が出土している。

**出土遺物（第27図3~9）** 3・4は弥生後期の壺口縁部である。外反気味にのびる複合口縁をもち、外面に多条の平行沈線を施す。5は底部である。6は土師器壺口縁部で、若干複合口縁が残るものである。7は須恵器壺身である。口縁部は直立気味に長くのび、受け部は短く横にのびるものである。8は須恵器壺口縁部である。口縁部は外反してのび、端部は断面三角形を呈す。外面には波状文を施している。9は須恵質の土馬で、雄の裸馬である。右前足が欠損して出土した。目は刺突して表現し、たてがみは粘土を貼り付けている。股間に男根・睾丸が表現されている。表面は指頭圧痕およびナデが施されている。

#### S B-03 (第16図)



第28図 SB-04a, 04b実測図



第29図 SB-07、10、11実測図

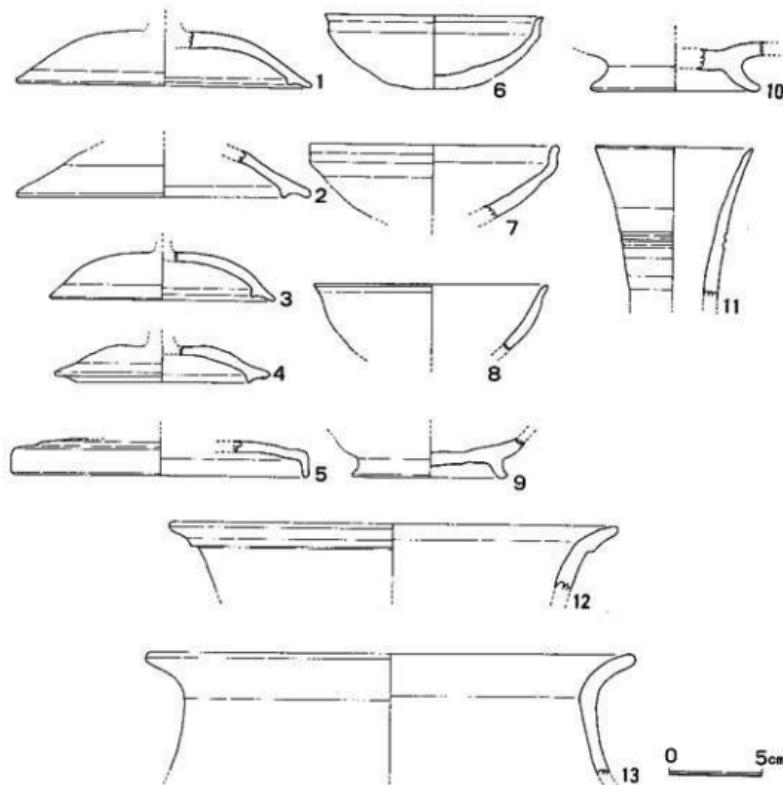
S I - 03と接している掘立柱建物跡である。斜面を削って平坦面をつくりだしているが、南側はS I - 03によって切られていた。平坦面の規模は残存長で、長軸10m、短軸1.5~2.8mを測り、壁高は約1.2mを測る。床面に上縁径26~46cm、深さ20~28cmの4個のピットを検出したが、建物跡は復元できなかった。

遺物は覆土中に碧玉・瑪瑙の剝片が認められたが、S I - 02からの流れ込みと思われる。

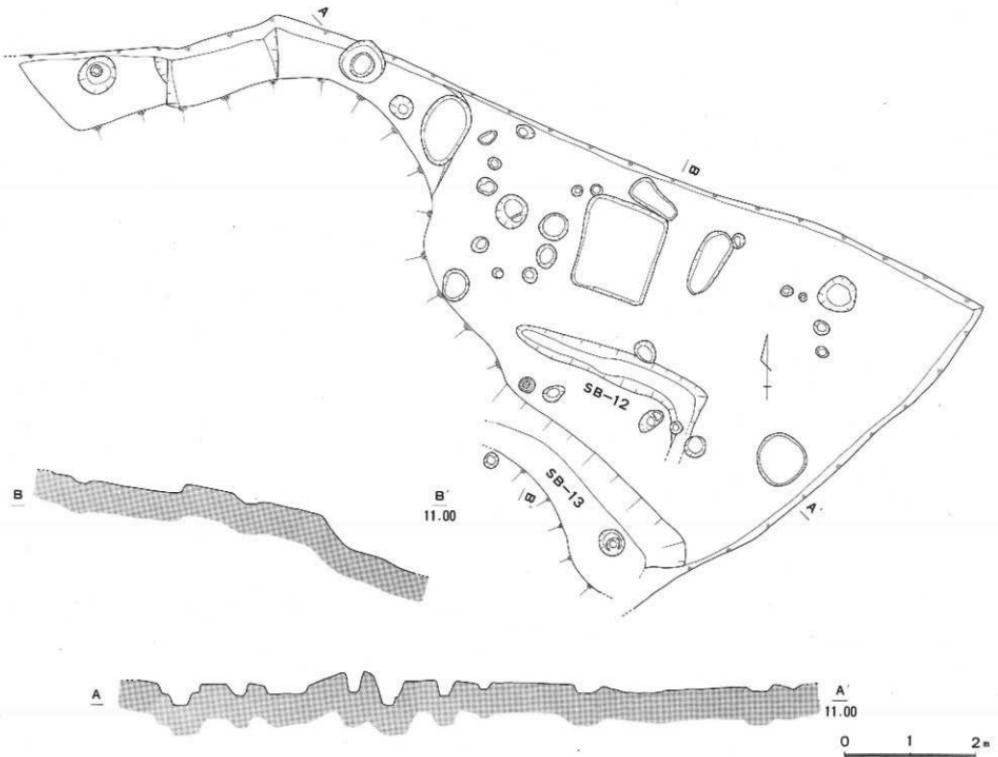
#### S B - 04 (第28図)

調査区北東端の尾根上平坦面に位置し、2棟の建物跡が重複する形で検出された。1方をS B - 04 a、もう一方をS B - 04 bとする。

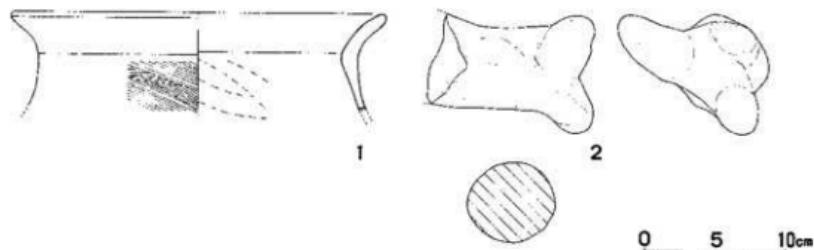
#### (S B - 04 a)



第30図 S B - 07出土遺物実測図



第31図 SB-12, 13 ピット群実測図



第32図 SB-12出土物実測図

地山の風化が著しく、全形は不明だが2間×2間の建物跡の柱穴を検出した。柱穴の平面形はほぼ円形を呈しており、上縁径28~40cm、深さ22~30cmを測り、桁行4.2m、梁間3.0mの規模を測る。遺物は何も出土していない。

#### (SB-04b)

04a 同様に地山の風化が著しく、全形は不明であるが2間×2間の建物跡の柱穴を検出した。柱穴の配置状況から判断すると、総柱の建物跡であった可能性を考えられる。柱穴の平面形はほぼ円形に近く、径40~42cm、深さ22~38cmを測り、桁行3.8m、梁間3.4mの規模を測る。

遺物は何も出土していない。

#### S B - 07 (第29図)

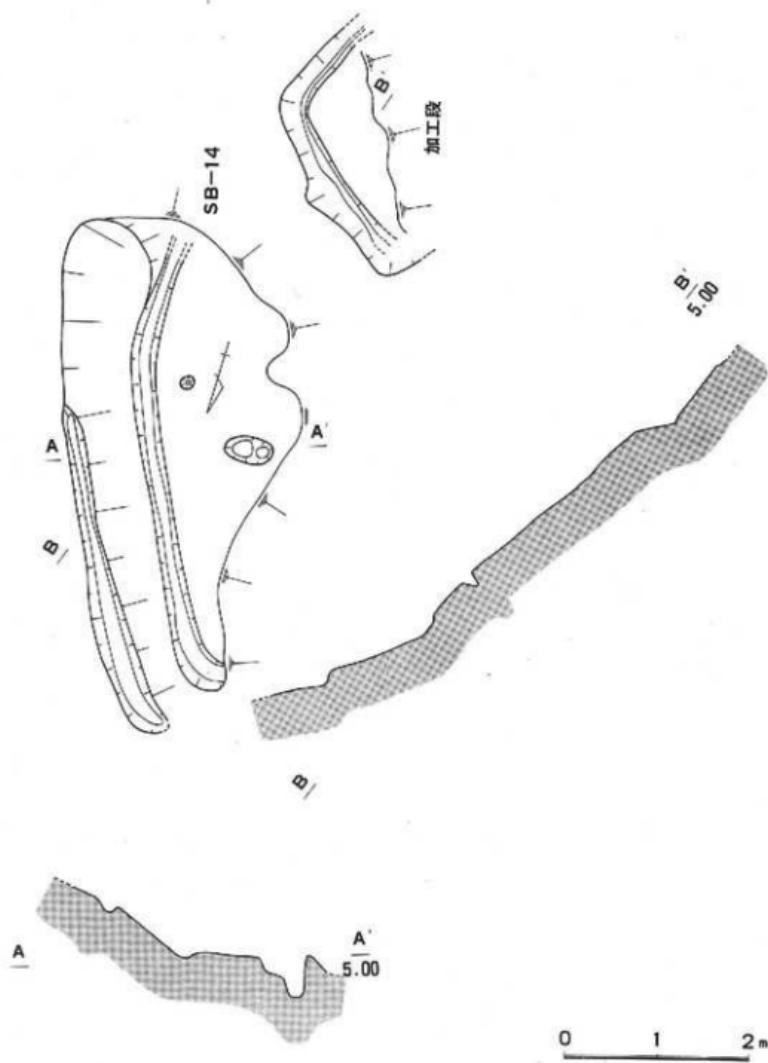
調査区南東斜面下方の平坦面に位置し、S I - 04の西隣りで検出した、東西方向2間以上の建物跡である。柱穴の平面形は円形および隅丸長方形を呈しており、P 1は長軸1.0m、短軸74cm、深さ50cm、P 2・P 3は上縁径60~74cm、深さ44~62cmを測り、他の掘立柱建物跡の柱穴と比較すると、若干大きいものである。東西2間の距離は3.4mを測る。

遺物は柱穴の周辺から須恵器蓋壊類と土師器壊が出土している。

**出土遺物 (第30図)** 1~5は須恵器蓋である。1~4は口縁部にかえりが付くもので、5は口縁部が垂直に屈曲して端部に至るものである。6~10は須恵器壊身である。6~8は口縁端部付近がくびれるもの、9・10は高台を有する壊である。11は長頸壺の口縁部で、直立気味にのびる頸部から外反する口縁部をもつ。12は須恵器壺の口縁部で、口縁端部付近で段をなして端部に至る。13は土師器壺で外反する口縁部をもつ。

#### S B - 10 (第29図)

S B - 07の西隣りに接し、S B - 11と重複していた。斜面を削って平坦面を作り出しているが、大半が流出していた。平坦面の規模は残存長で長軸6m以上、短軸1.0mを測る。壁高は残存部分で20cmを測り、壁沿いで幅約30cmの溝を検出したが、ピットに切られていた。この建物跡に関する柱



第33図 SB-14 加工段実測図

穴は小さめのもので、径16~20cm、深さ18~30cmを測るが、建物跡は復元できなかった。また、遺物も出土していない。

#### S B-11 (第29図)

S B-10の南に位置する。斜面を削って平坦面を作り出しているが、大半が流出していた。平坦面の規模は残存長で長軸4m以上、短軸1.4mを測る。壁高は残存部分で45cmを測り、中央から西壁にかけての壁沿いに幅約18cmの溝が廻っていた。床面でピットを2個検出したが、建物跡は復元できなかった。また、遺物も出土しなかった。

#### S B-12 (第31図)

調査区東端の平坦面に位置し、周囲にはピット群と土壌がある。S B-12はこの中で溝とピットで構成される。溝はL字状に折れ曲がるもので、幅50cm、深さ10cmを測るが、全形は不明である。この溝の内側に3個のピットを検出したが、建物跡は復元できなかった。ピットは円形および梢円形を呈し、長軸24~40cm、短軸22~24cm、深さ20~28cmを測る。

遺物は床面上から土師器甕と土製支脚が出土している。

**出土遺物 (第32図)** 1は甕で外反する口縁部をもつ。2は土製支脚で三叉突起である。表面はナデ調整を施す。

#### S B-13 (第31図)

S B-12の床面から掘り込まれているが、大半が流出しているため全形は不明である。加工段の平坦面は残存長で長軸3.0m、短軸0.5~1.0mを測り、壁高は最大で60cmを測る。柱穴は2個検出しておらず、上縁径20~40cm、深さ22~34cmを測る。

遺物は土師器の小片が出上しているが、図化は不可能であった。

#### S B-14 (第33図)

調査区南東の西向き斜面に位置する。斜面を削って平坦面を作り出しているが、遺物包含層が厚く堆積しており、大半が流出していた。床面は残存長で長軸4.9m、短軸1.8mを測り、床面標高は5mと低い。壁高は最大で48cmを測り、壁沿いに幅22cm、深さ5cmの溝が廻っている。また、壁の上面にも溝が認められることから、他の住居と重複していたものと思われる。柱穴は1個で平面形は梢円形を呈しており、長軸52cm、短軸30cm、深さ44cmを測る。建物の形態・規模等は不明であり、遺物も包含層が堆積していることから判断できなかった。

#### 加工段 (第33図)

S B-14の下方に位置する小さな加工段であり、床面標高が4mと低い位置にある。大半が遺物包含層によって流出していたため、平坦面の規模は残存長で長軸2.0m、短軸0.9mを測る。壁高は最大で35cmを測り、壁沿いに幅14cm、深さ3cmの溝が廻っている。

遺物は包含層が堆積していたため判断ができなかった。

#### S B - 15 (第9図参照)

S I - 02の上面から掘り込まれている建物跡である。柱穴は4個検出しており、3間以上の建物跡と思われる。柱穴の平面形はほぼ円形に近く、上縁径36~40cm、深さ18~32cmを測る。柱穴間距離は1.7mと一定であった。

この建物跡に伴う遺物は何も出土していない。

#### 大原横穴 (第2図)

北東より、南西に突出する半島状の丘陵斜面に、2基の横穴墓を検出した。それを、大原1号横穴、大原2号横穴と呼称する。

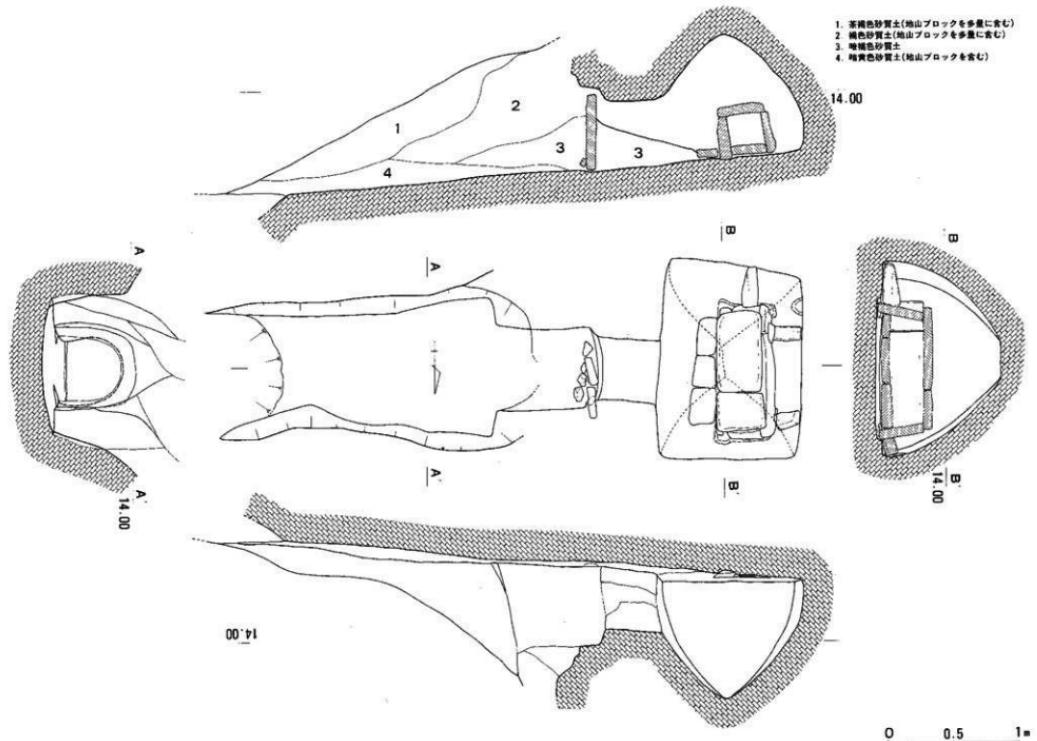
#### 大原1号横穴 (第34図)

丘陵部の斜面に、ほぼ、東向きに開口する。玄室床面の標高が13.0mであり、横穴のある丘陵部の最高地点が21.6m、溝田と接する丘陵最下部が4.0mであるから、丁度、丘陵の中間に位置することになる。

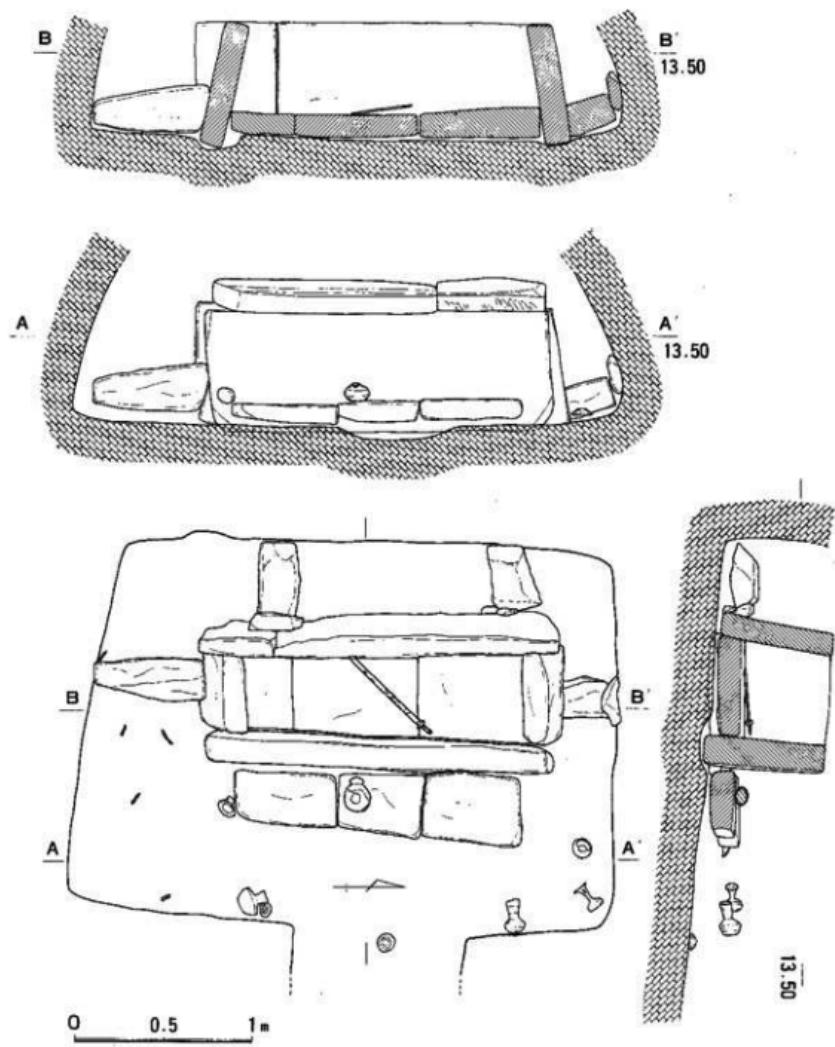
##### 〔前庭・羨道・玄門〕

前庭部は、長さ約4.0m、幅は前庭前部に近い所が最小で1.3m、それから少しづつ広がり、羨道入口で2.1mと最大幅を記録する。羨道については、上部の地山崩壊により、高さは不明であるが、長さ、幅は、それぞれ1.6m、1.2mである。また、玄門は天井が緩やかなアーチ状を呈し、右壁の一部に欠落が認められるものの、全体としては、ほぼ、完全な形を保ち、長さ0.9m、幅1.0m、高さ1.0mを測る。なお、玄室入口には数個の、いわゆる「荒島石」を利用した閉塞施設が認められた。これらは、縦長1.0m、横長0.5m、厚さ0.2mのはつり加工を施した2枚と、適當な大きさに、叩き割ったものと思われる割石数個でなっている。閉塞の方法は、ほぼ同大の、加工を施した2枚で開口部を塞ぎ、更に、割石を利用して、隙間を埋めたものと考えられる。板状の閉塞石2枚の横幅の合計は1.0mとなり、これは、閉塞部の開口幅と同じになるが、発掘時は右側に0.3m移動していた。隙間用に使ったとおもわれる割石も床面にあったことから、閉塞の後、何らかの理由による開口が推測される。なお、前庭部から玄室に向かっては、緩やかな登り勾配となって、その高度差は、およそ0.6mとなる。遺物については、前述の閉塞石以外には、土層中に、須恵器の大甕の破片や、碧玉・瑪瑙の剥片がわずかにあった。おそらく、上部の構造からの流れ込みであろう。なお、地山上に、低地から前庭に達する、道状の削り込みを検出した(第2図)。ひと人通れる幅で、長さは20mに近い。横穴に関連する墓道と考えられる。

##### 〔玄室〕 (第35図)



第34図 大原1号横穴実測図



第35図 大原1号横穴玄室内石棺実測図

平面プランは、奥行き3.2m、幅3.6m～2.8mを測り、わずかに台形を呈している。また、高さは最大1.9mを測り。その縦断面は、外湾した曲線をもつ三角形状を呈しており、擬似四注式の平入りである。玄室内には、数点の遺物とともに、保存状態の良好な石棺が置かれ、石棺除去後の床面には、石材安置のための浅い堀込みが認められた(第36図)。玄室の保存状態は、閉塞石の隙間からの土砂の流入以外は、天井からの欠落等の損傷もほとんどなく、石棺同様保存の状態は良好であった。

#### 【石棺】(第35図)

玄室の奥壁沿いに、長軸方向に直交するかたちで設置された石棺は、加工した「荒島石」を箱型に組み合わせたものである。主要部は長さ1.8m、幅0.9m、高さ0.8mの大きさで、床石には、3枚の板石を置き、両側石に各1枚、後壁に2枚、前壁に1枚の板石で僅かに内傾するように囲み、さらに、その上に、蓋石として、わずかに屋根型に加工した1枚を含む2枚の板石を載せたものである。床石は長さ35～70cmのもので、北側石側が大きくなっている。使われた板石はすべて加工されたもので、厚さはそれぞれ15cm前後のものである。また、石棺の前には長さ50～58cm、幅28～40cmの3枚の板石が置かれ、さらに、石棺の後部に2個、左右側石側に各1個の柱状に加工した石材が、石棺の安定をはかる目的で置かれていた。石棺内からは、中央部斜めに置かれた大刀一振りを検出したが、それ以外には何も認められなかった。

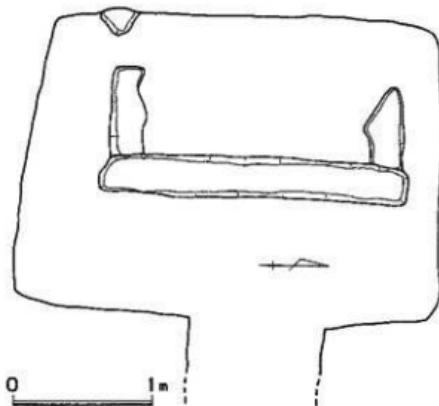
蓋石は2枚の板石を組み合わせており、長さは1.2mと0.6m、幅は0.7mを測る。側面には幅約10cmの平坦面が残っており、内側は若干掘りくぼめられていた。表面には幅4cm程度のノミ痕が明瞭に観察される。

石棺床面に、薄く粘土状の土が堆積しており、このことは、一度は水没した可能性を裏付けるものであろう。

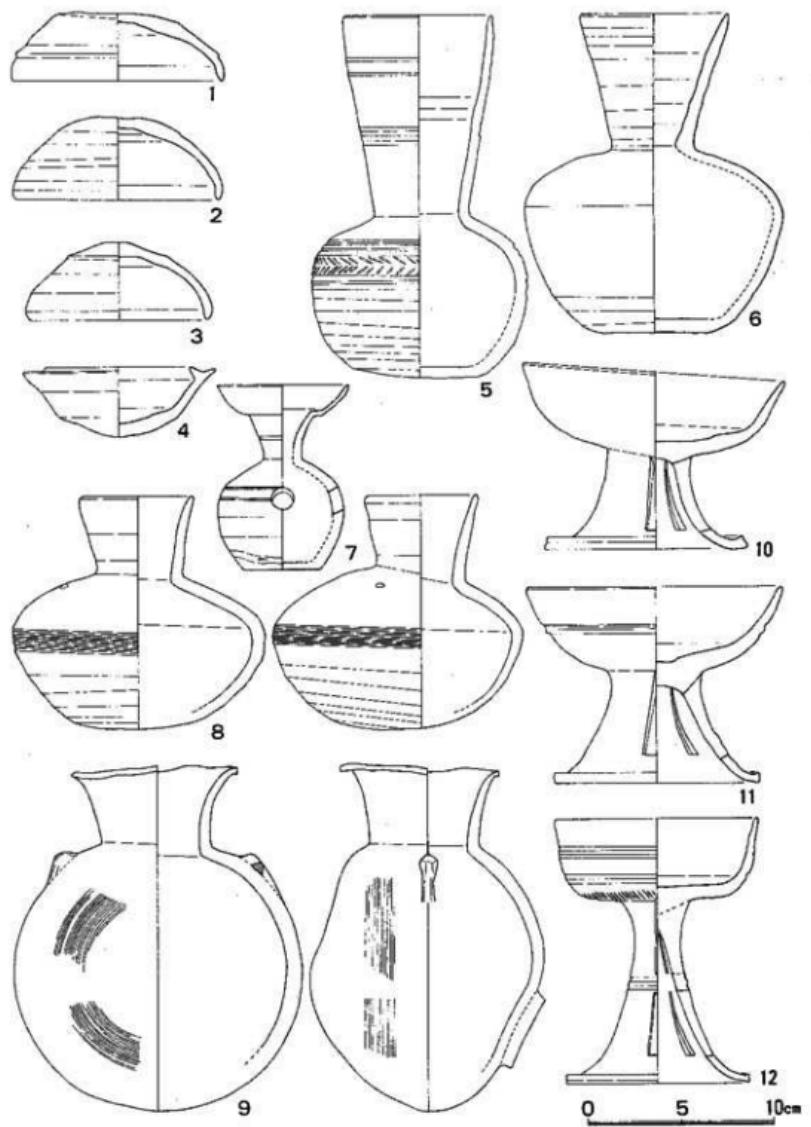
#### 【玄室出土遺物】

石棺以外に、十数個の須恵器とともに、大刀、刀子、鉄鎌、金環が出土している。石棺内の大刀以外は、玄室の中に散在しており、規則性のようなものは、何ら認められなかった。出土遺物の大要は、次のとおりである。

須恵器(第37図) 坏蓋3、坏身1、高坏3、長颈甕2、甕1、提瓶1、平瓶1の合計12個を数える。蓋はいずれも口縁部が内湾気味に下るもので、肩部に棱



第36図 大原1号横穴石棺除去後実測図



第37図 大原1号横穴出土遺物実測図

があるもの（1）と、ないもの（2・3）がある。調整はいずれも、側面は内外とも回転ナデ、他は、内部が静止ナデ、外部はヘラ切り後静止ナデを施こしている。坏身（4）は、口縁部の立ち上がりは短く、調整は、坏蓋と同様である。高坏については、低脚で三方向に透孔のあるもの（10・11）と、一段目三方向透孔の上に、さらに、二段目の透孔の痕跡のあるもの（12）がある。なお、（11）は坏部の中央に沈線、（12）の場合は、一段目と二段目の間に2本の沈線のほか、坏部に刺突文・稜・沈線をもつ。調整については、いずれも、回転ナデと坏部内側底部の静止ナデである。長頸壺（5・6）については、いずれも、調整は、回転ナデと胸部下部及び底部のヘラ削りであるが、（5）は胸部に比較して頸部が長く、さらに、胸部には、刺突による羽状文や沈線が認められる。頸（7）は小型で、頸部の径は小さく、口縁の径は、胸部の径にはば等しい。調整は、下部及び底部のヘラ削りを除いては、回転ナデである。平瓶（8）は胸部のカキ目に加えて、退化した突起をもつ。調整は、底部のヘラ削りと回転ナデの併用である。なお、ヘラによる刻線が、胸部と底部に数本認められる。提瓶（9）については、形骸化した突起をもち、胸部全体にカキ目を施しているが、火ぶくれ、不純物の付着、歪み等焼成中の影響を受けている。

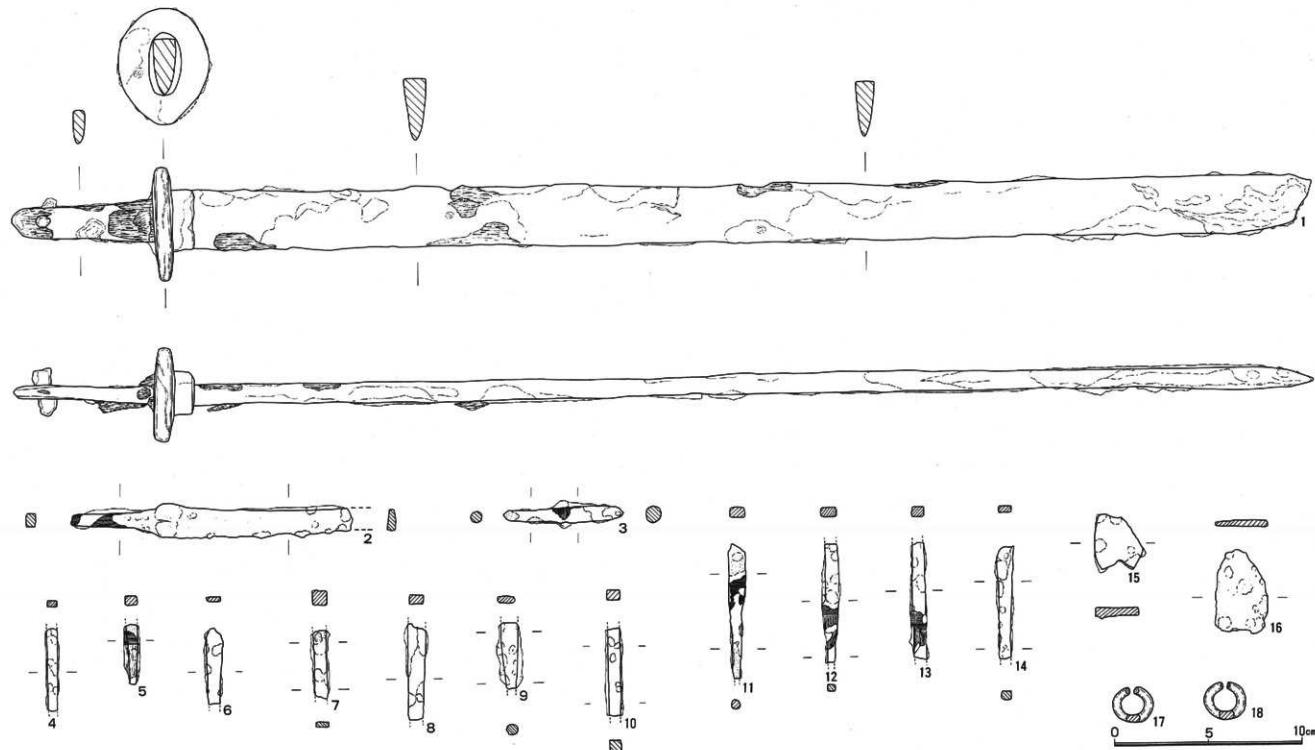
**金属製品**（第38図） 大刀は、前述の石棺内に置かれていたものである。刀身は61.8cm、茎をくわえた全長は69.4cmである。保存の状態は比較的良好で、刀身や茎にくわえて目釘や鐔、さらに鞘や把の木質部がわずかに残る。目貫孔はひとつで、鐔は長径6cm、短径5cmを測る倒卵形である。刀子は2点（2・3）ある。（2）は残存長15cm、茎の部分に、わずかに木質の痕跡らしきものが残る。（3）はより小形で、長さ6.5cmを測り、一部に、糸巻き様の痕跡をとどめる。いずれも、銹化が著しい。鉄鎌は13点（4～16）ある。銹化が著しく、全体の形を留めているものは皆無である。（4～14）は有茎のもので、さらに、（5・11～13）には、繊維状の痕跡や、それに、直交する糸巻きの跡が認められる。板状の（14・15）はおそらく刃部であろう。茎の有無は不明である。金環（17・18）は、いずれも、直径2cm程度のものである。金箔はよく残っている。材質は、切口に綠青が認められることから、鋼か、銅を含む合金であろう。

#### 大原2号横穴（第39図）

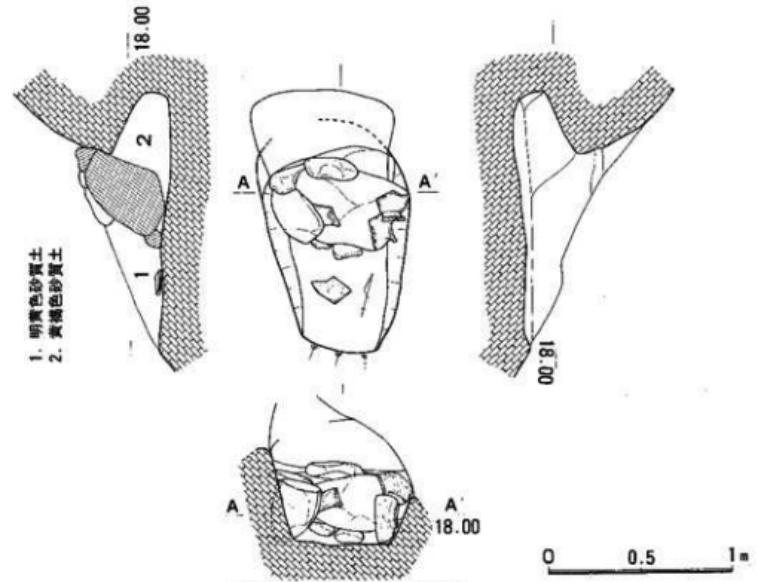
丘陵の突端近く、標高18mの地点に、ほぼ南向きに開口する。大原2号横穴から西へ、およそ25mの距離である。

#### 【墓道・玄室】

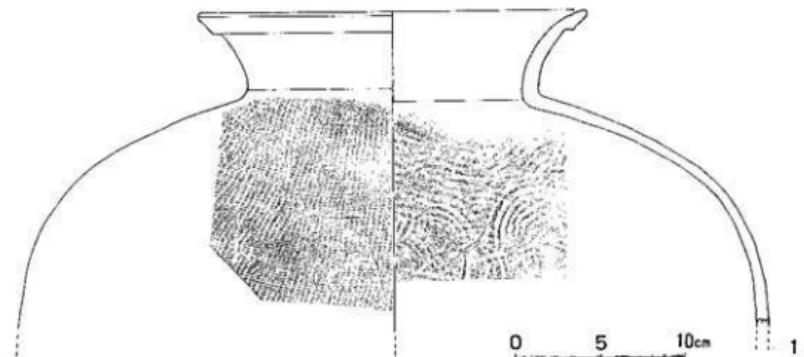
墓道前面から玄室奥までの長軸は1.4m、それに直交する最大幅は65cmを測る。玄室は高さ30cmの入口から奥にかけて少しずつ低くなり、奥行き34cmで高さ20cmの奥壁に達する。玄室入口に長径65cmの梢円形の石を立てかけ、さらに、小形の丸石で隙間を塞いでいる。玄室内部には、黄褐色の砂質土が流れ込み、遺物は何も発見されなかった。



第38図 大原1号横穴出土金属製品実測図



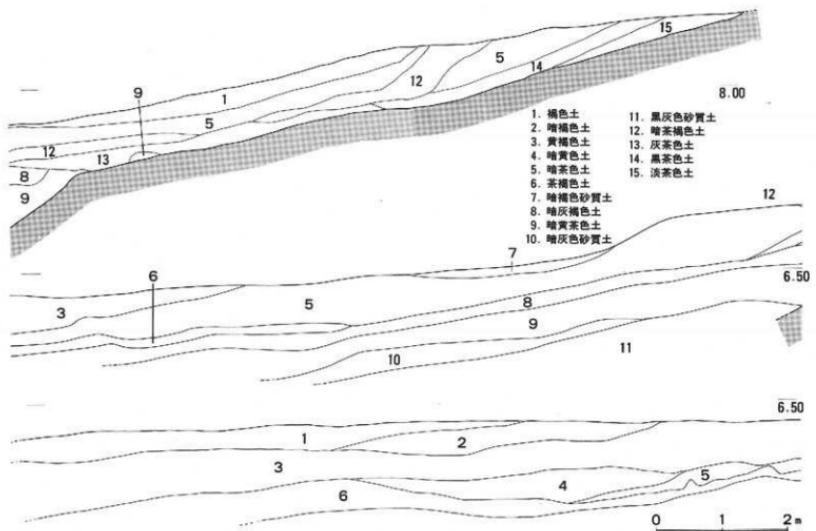
第39図 大原2号横穴実測図



第40図 大原2号横穴閉塞用須恵器壺実測図

〔出土遺物〕(第40図)

玄室入口を塞いだ閉塞用の石に、数枚の、須恵器の破片がかぶせてあった。口縁部を含む大甕の一部で、口径22.5cm、残存部の最大の胴径は43.6cmを測る。調整は、表裏ともタキである。



第41図 遺物包含層土層図

## 遺物包含層

調査区南東斜面下方の平坦面中央部から水田部にかけて厚く包含層が堆積していた。深い所で約4mを測るが、粘土質のため崩落が激しく、土層を全て図化することはできなかった。

遺物は各層から出土しているが、おもに第5・8・9・10・11層から多量に出土している。第5層は暗茶色土で須恵器・上師器を多く含んでいる。第8層の暗灰褐色土は須恵器が少くなり、土師器の量が増えている。第9層の暗黄茶色土からは土師器、弥生後期の土器が出土している。第10層の暗灰色砂質土も第9層と同じ傾向を示す。第11層の黒灰色砂質土は弥生後期の土器を多く含んでいた。図化できなかつたが、最下層は遺物出土量は減少していたが、弥生中期の土器が多く含まれていた。

## 弥生中期の土器（第42図）

おもに最下層から出土しており、図化したものは8点である。

1～4は甕である。1は口縁部が「く」の字状に屈曲し、屈曲部外面に指頭圧痕文帯をもつもので、口縁端部は拡張されて内傾するものである。口縁外面に凹線文と刻み目を施す。2～4は1と似た形状をしているが、屈曲部外面に指頭圧痕文帯をもたず、口縁端部に小さな面をもち、1～2条の凹線を施すものである。5は壺であり、筒状の頸部から横方向に大きく開く口縁部をもち、口縁端部はわずかであるが上方に拡張する。頸部外面に凹線文を施している。6は壺か壺の底部である。外面ヘラ磨き、内面ヘラ削りを施している。7は外面漆塗りの壺形土器である。胴部中央に最大径があり、そこから内傾してのびる口縁部をもつ。口縁端部は内側に肥厚し、外面に刺突文を施す。口縁端部から1.2cm下方に径3mmの小孔を穿ち、外面に平行沈線を施している。8は高杯の脚部で、端部が上下に若干肥厚するものである。

## 弥生後期の土器（第43・44図）

図化したのは壺・壺・鼓形器台の計32点である。

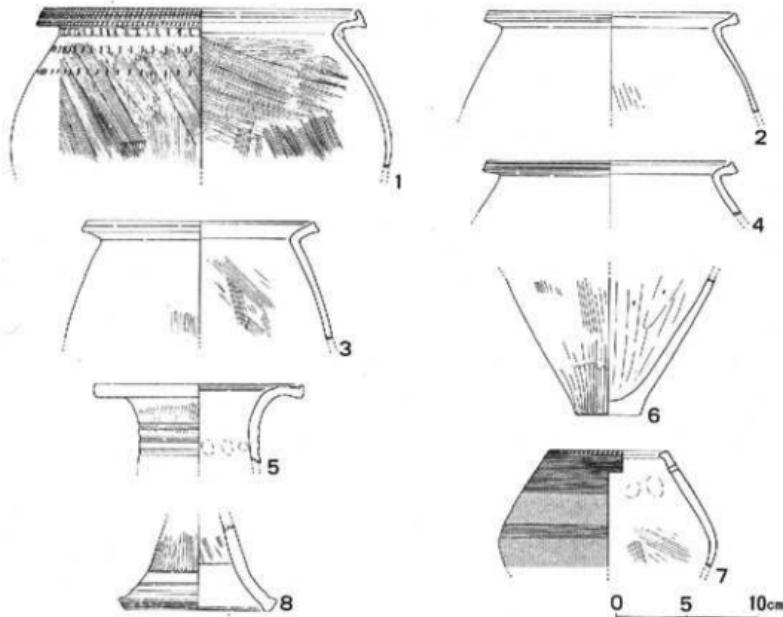
壺は10点（第43図1～10）ある。1・2は口縁端部が上下に拡張し、やや内傾した複合口縁状を呈するものである。端部外面には凹線文が施されている。また、頸部は円筒状に近いものである。3・4・6～10はやや短めの複合口縁を有するもので、外傾するものと、直立するものがある。外面には平行沈線を施す。5は外反して長くのびる複合口縁をもつもので、外面に平行沈線を施す。甕は16点（第43図11～15・第44図1～11）ある。14は口縁部がくりあけ口縁状を呈するものである。その他は複合口縁を有するもので、口縁部が直立するもの、外傾するもの、外反するものがある。いずれも口縁部外面に平行沈線を施している。12はやや厚い作りをしている。44図1～3は複合口縁部の稜が下向きに鋭く突出するものである。また、肩部に刺突文を施すものもあり、ヘラ状工具を使用するもの（12）、棒状工具を使用するもの（13）、貝殻腹縁を使用するもの（15・44図8）があ

ある。鼓形器台は6点（第44図12～17）ある。受台部・脚台部ともに複合状を呈し、外面に多条の平行沈線を施している。

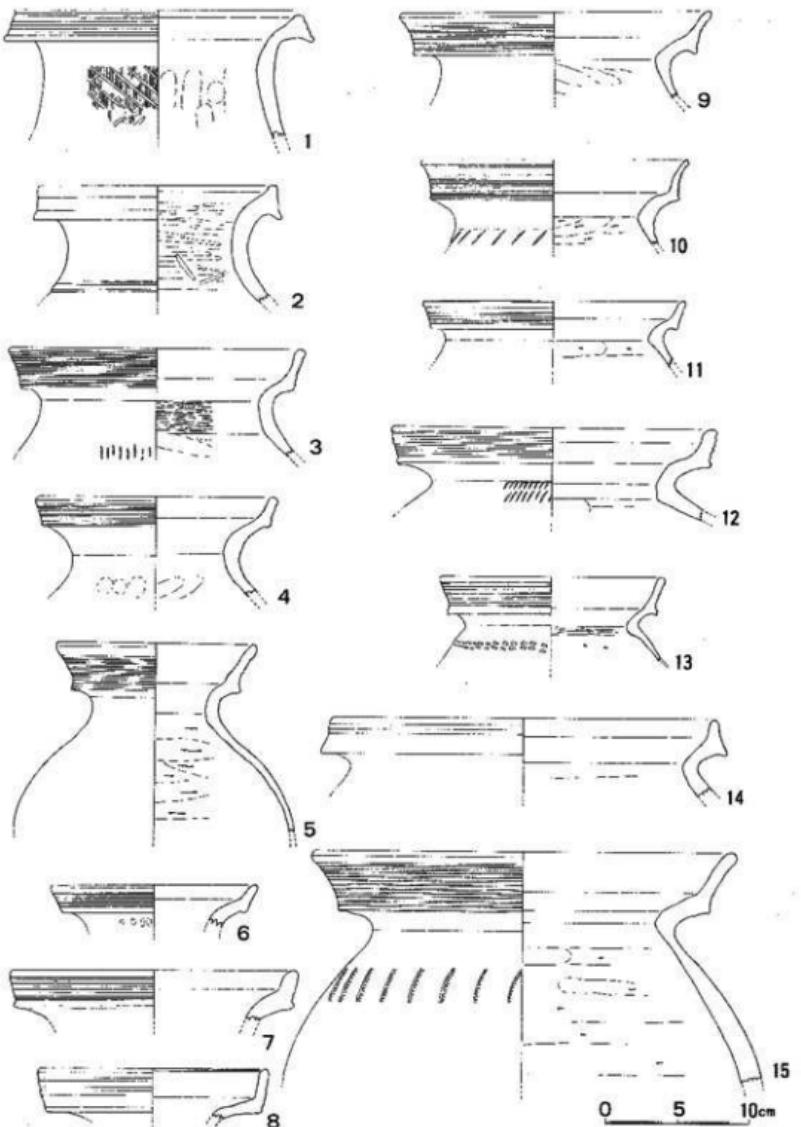
#### 土師器（第45～48図）

壺・甕・鼓形器台・高坏・低脚坏・坏・小形丸底壺が出土しており、計74点図化した。

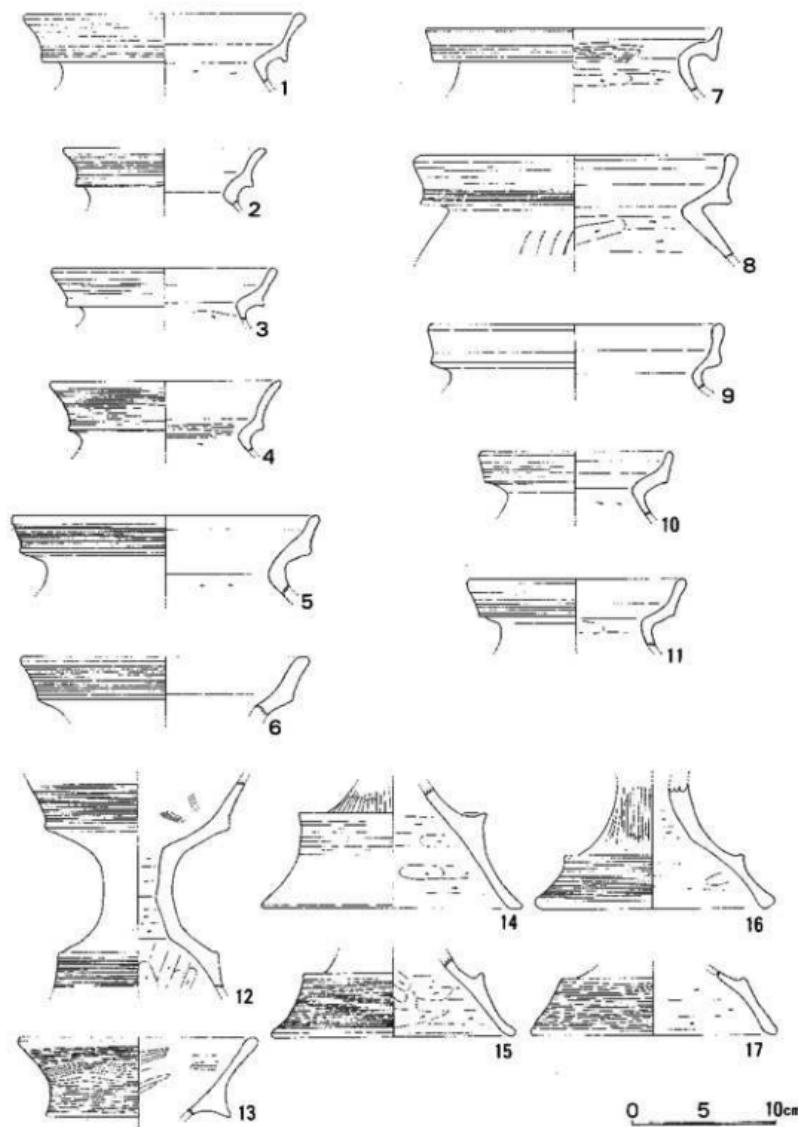
壺・甕類には複合口縁を有するものと、単純口縁のものがある。また、複合口縁にも稜の鋭いものと鈍く退化したものがある。2は壺で外反してのびる口縁部をもち、端部は外に肥厚して平坦面をつくる。複合口縁部の稜は鋭く突出するものである。6～8はやや退化傾向にある複合口縁を有する壺である。口縁部は外傾もしくは外反するもので、複合口縁部の稜は丸みをおびるものと段をつくるものがある。8は口縁下方から頸部にかけてハケ目原体による羽状文を施している。1・3～5は複合口縁部の稜が鋭く突出する甕である。口縁部は外傾するものであり、1・4は端部が内側に肥厚する。46図1・2は複合口縁が退化気味のもので、稜下半に丸みをもつ。口縁部は外傾および直立する。3～18・47図1・2は退化した複合口縁を有するものである。口縁部は短く外傾してのび、稜は鈍く突出するもの、段状をなすものなどがある。第47図3～18は単純口縁を有する壺・甕である。口縁部が「く」の字状に屈曲するもの、外傾するもの、外反するものがある。高坏は坏



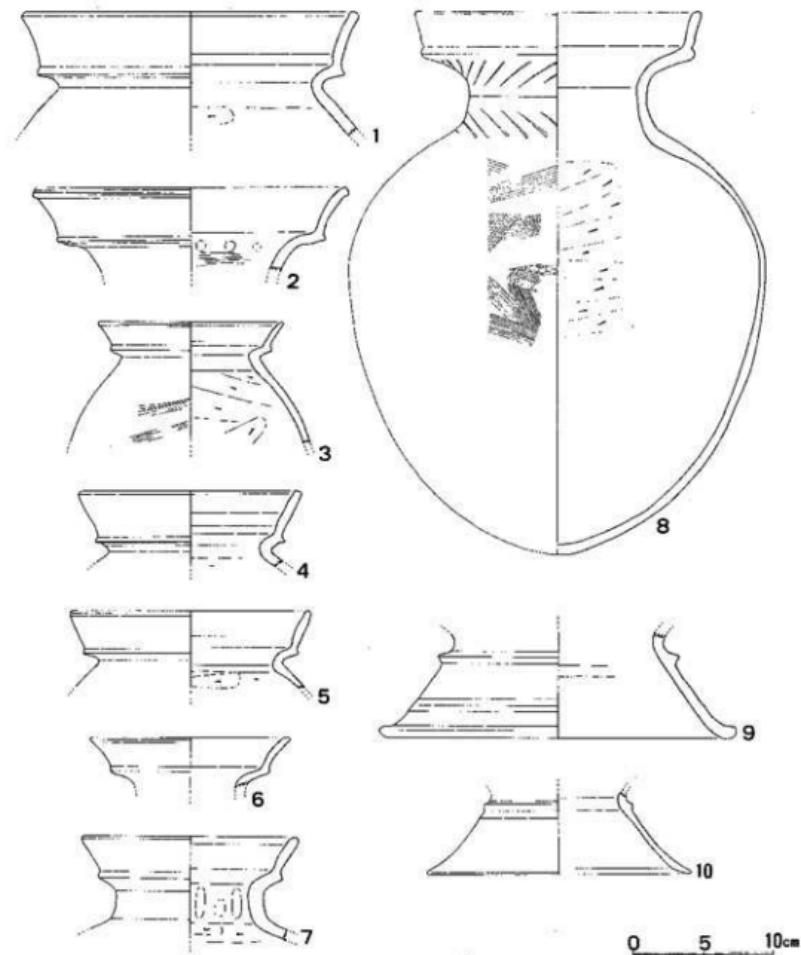
第42図 包含層出土弥生土器実測図(1)



第43図 包含層出土弥生土器実測図(2)

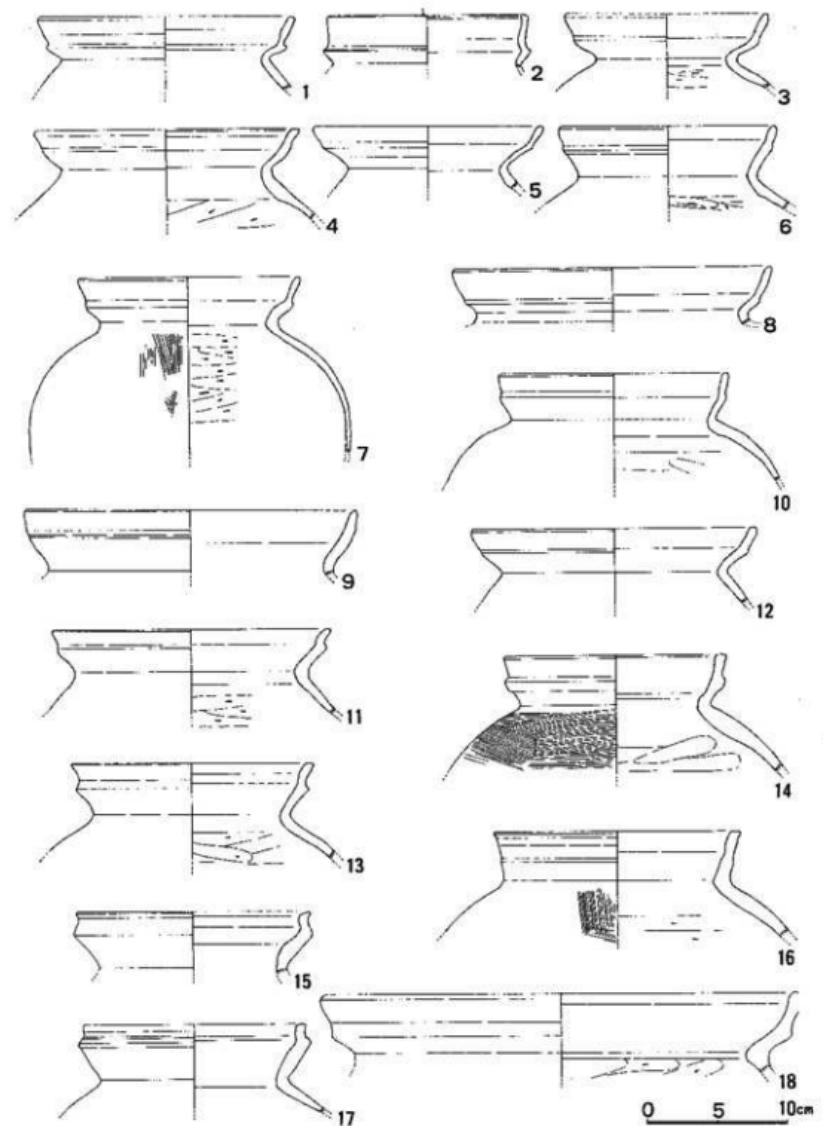


第44図 包含層出土弥生土器実測図(3)

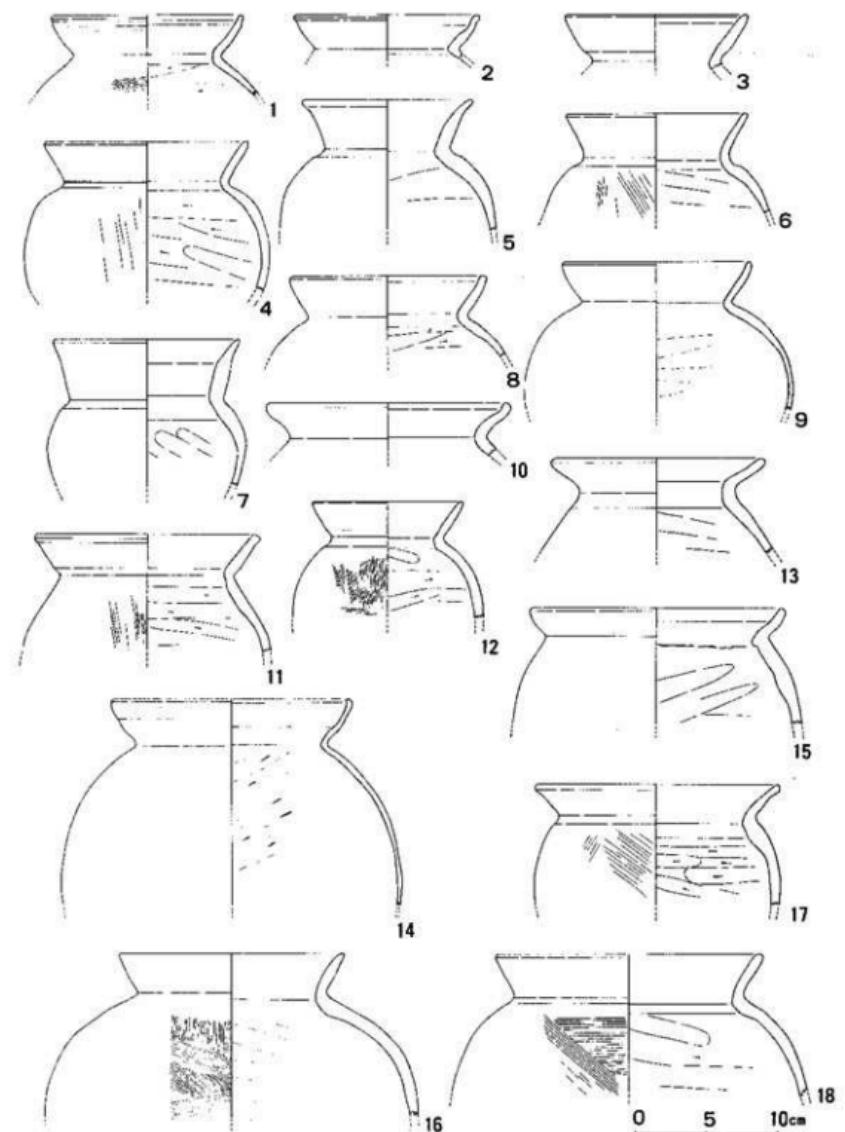


第45図 包含層出土土器実測図(1)

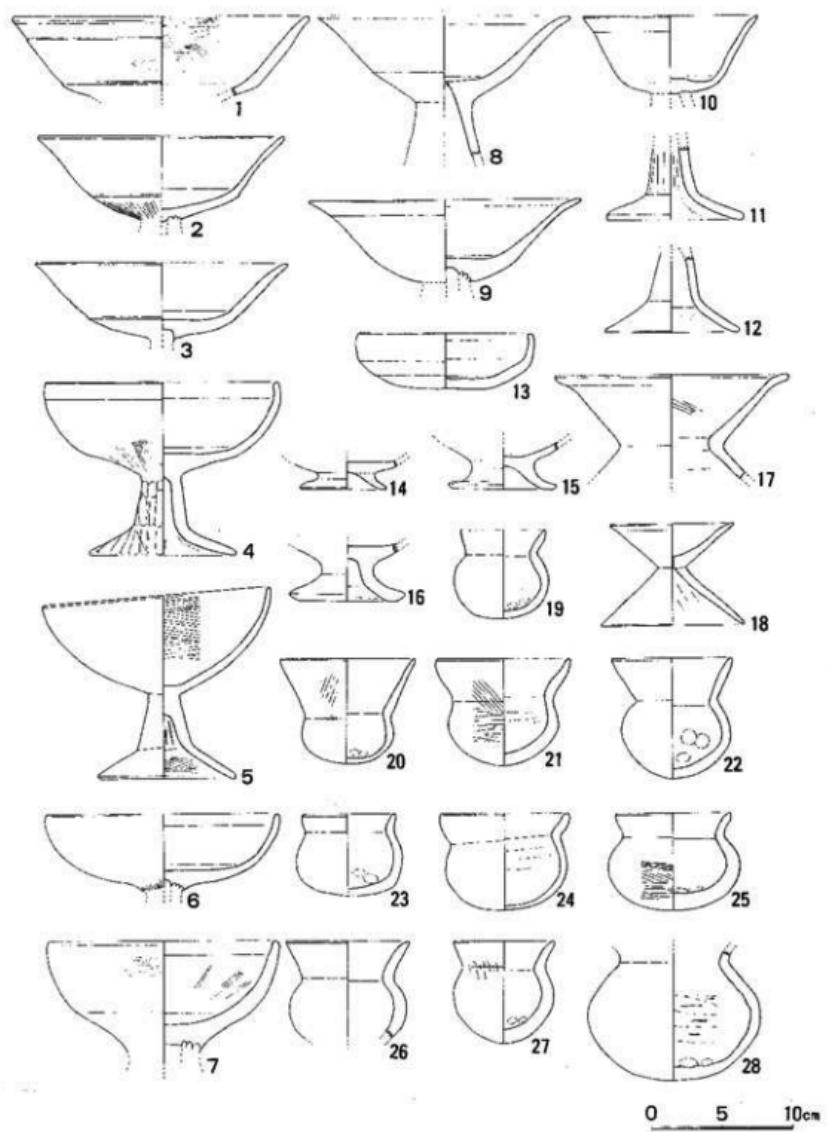
底部と口縁部の境に段をもつもの（1～3）、壺部が湾曲するもの（4～7）、丸みをおびる体部から緩やかに外反する口縁部をもつもの（8～10）がある。11・12は脚部で円筒状の筒部からハの字状に広がる裾部をもつ。13は壺で内湾する口縁部をもつ。14～16は低脚壺の脚部で、大きく開くものである。器台形上器は筒部が狭くなるもの（第45図9・10）と、筒部が無くなり器受部と脚台部が「く」の字状を呈するもの（第48図17・18）がある。18は布留式系のものと思われる。小形丸底



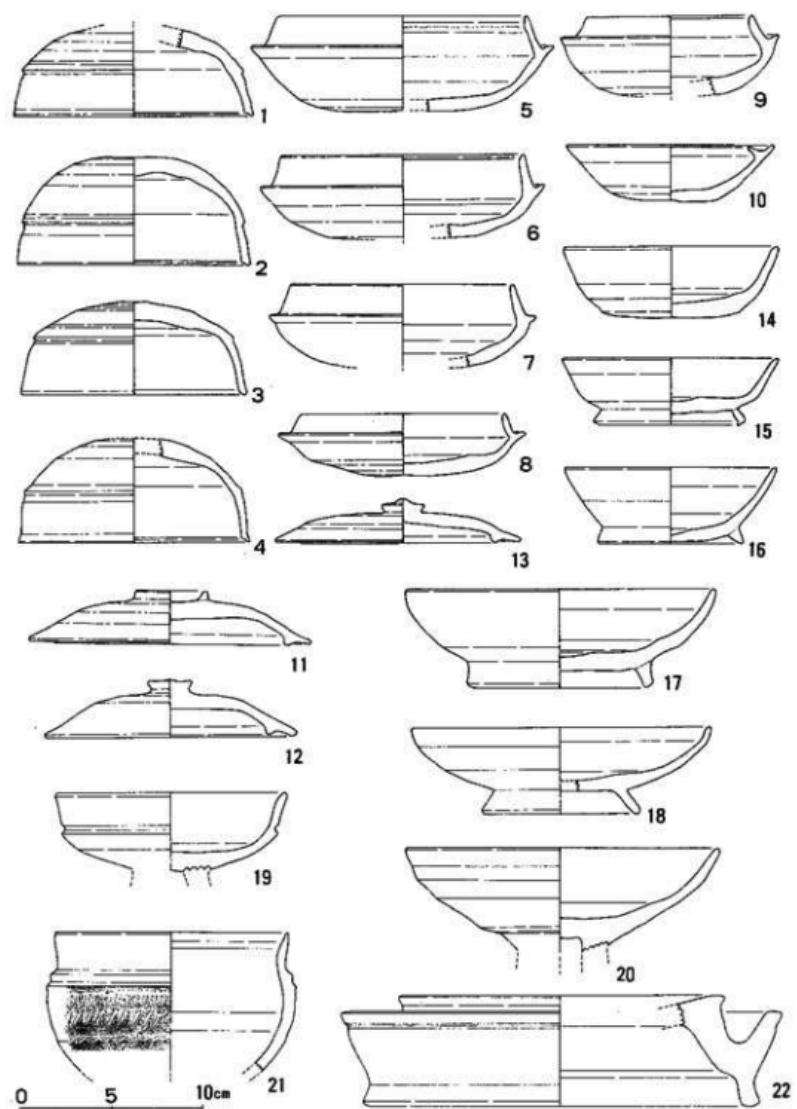
第46図 包含層出土土器実測図(2)



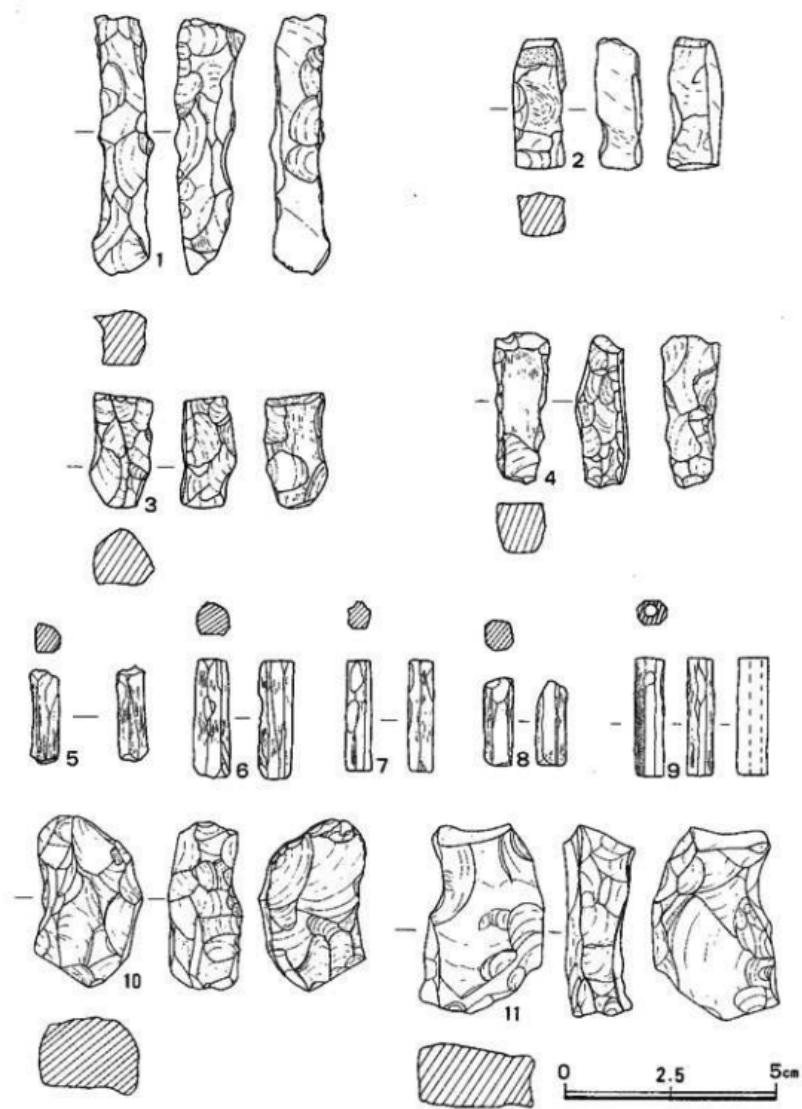
第47図 包含層出土土器実測図(3)



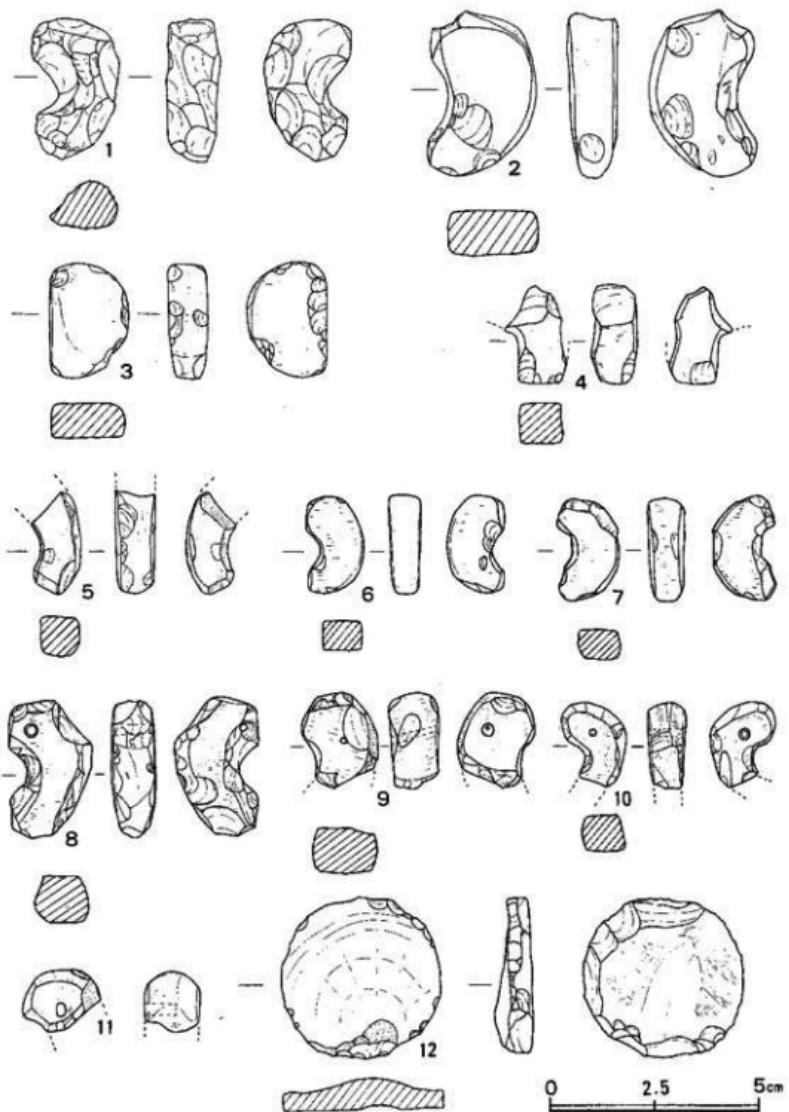
第48図 包含層出土土器実測図(4)



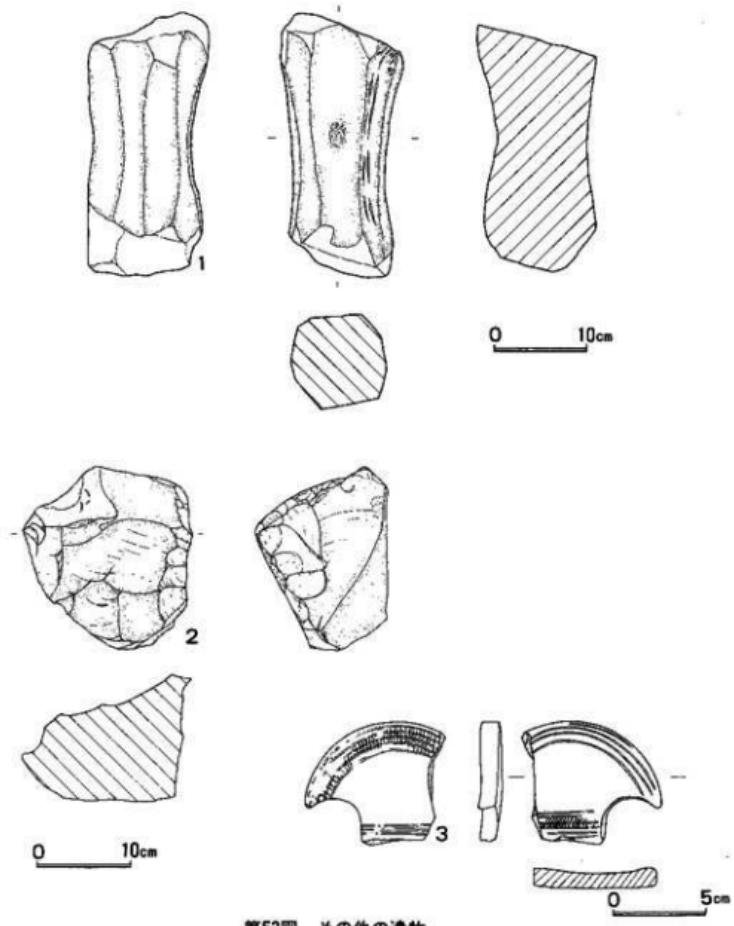
第49図 包含層出土須恵器実測図



第50図 包含層出土管玉、勾玉未製品実測図



第51図 包含層出土勾玉、玉製品実測図



第52図 その他の遺物

壺は口縁部が長く外傾してのびるもの（20・22・26）と、やや短めの口縁部をもつもの（19・23～25・27）がある。20は偏平な体部に長く外傾してのびる口縁部をもつもので、布留式系のものと思われる。

#### 須恵器（第49図）

蓋坏類、高坏、硯の計22点である。

蓋はかえりの付くもの（11～13）とそうでないもの（1～4）がある。1～4は口縁部が垂直気味に下り、端部内面に段および内傾する平坦面を有するものである。肩部の稜はやや鋭いもので、天井部は丸みをおびる。天井部外面にヘラ削りを施す。11～13は口縁部内面にかえりをもち、天井部外面中央につまみを付けるもので、11は輪状つまみ、12・13は宝珠状つまみである。坏身はたちあがりを有するもの（5～10）、高台を有するもの（15～18）、そうでないもの（14）がある。たちあがりは内傾してのびるが、長いものと受け部と同じ高さのものがある。14は外傾してのびる口縁部をもち、底部は平らに近い。16～18は内湾する坏部に「ハ」の字を開く高台が付き、15は口縁部が内湾せずにやや外反気味にのびるものである。19・20は高坏である。19は坏部に沈線を施して稜を作り出すもので、20は内湾する坏部をもつ。21は坏で口縁部が直立してのび、体部の境に段を2段つける。体部外面に波状文を施す。22は硯である。陣の周縁に堤を設けない無堤式で、溝状の深い海をもつ。外堤は横上方にのび、端部は平坦面をもつ。ハの字状に短くのびる台脚を有している。使用痕等は認められなかった。

#### 玉未製品（第50・51図）

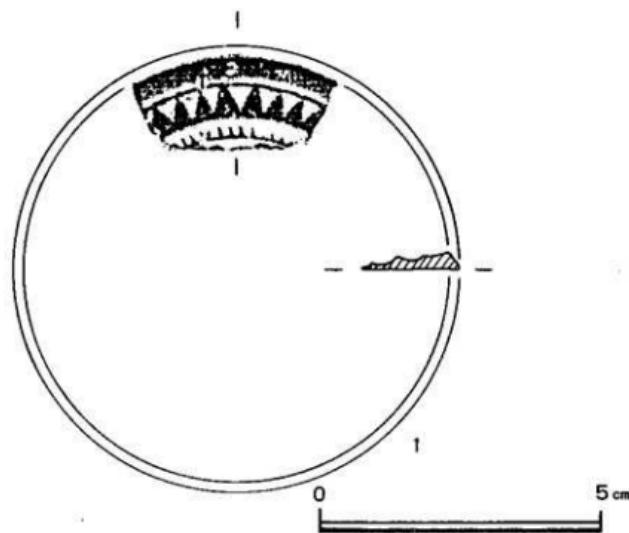
管玉未製品類は9点（第50図1～9）出土しており、いずれも碧玉製である。1・2は方柱状に分割したもので、研磨を施していないものである。3・4は方柱状に分割したものに研磨を施したもので、3は1側面と端部の1面に、4は1側面だけ研磨を施している。5～8は方柱状のものに研磨を施すことによって多角柱を作りだしたものである。いずれも側面の一部に剝離痕が認められる。9は多角柱に穿孔を施したもので、両面から穿孔が行われているが、側面に剝離痕が認められるため仕上げ研磨で失敗したものと考えられる。

勾玉未製品類は13点（第50図10・11、第51図1～11）出土しており、碧玉および瑪瑙を使用している。50図10・51図1・2・4・5・8～11は碧玉製、50図11・51図3・6・7は瑪瑙製である。50図10・11は勾玉用石核の素材を半月状に調整したものである。51図1は石核をC字状に調整したものである。2・3・6・7はC字状および半月状に調整したものに、研磨を施すものである。表裏および背部側縁に研磨を施しており、腹部側縁には調整剝離の痕跡が認められる。4・5はさらに腹縁部にも研磨を施したものである。8は表裏に研磨痕、腹部側縁に剝離と研磨痕、背部側縁に剝離痕が認められるものであり、穿孔を施している。穿孔後に腹部・背部側縁に剝離調整を加えている。9～11は全面に研磨が施され、穿孔をしているものであるが、11は貫通していないものである。12は有孔円盤の未製品で、裏面に研磨を施している。

#### その他の遺物（第52・53図）

砥石、黒曜石、分銅形上製品、鏡が出土している。

砥石（1）は長さ26cm、厚さ10cmを測るもので、材質は細粒砂岩質である。多角柱状を呈してお



第53図 鏡

り、側面は全て使用されている。黒曜石（2）は長さ19.8cm、幅18.1cm、厚さ13.8cmを測り、かなり大きめの原石である。分銅形土製品（3）は残存長で6.6cmを測るもので、A面側に若干湾曲している。A面は外周に櫛状工具による5条の円弧状沈線を施した後に、直行するように沈線を施している。中央部に3条の平行沈線が認められる。B面は外周に4条の円弧状沈線を施し、中央部に6条の平行沈線と斜行状の刺突文を施している。第53図は鏡片である。残存長3.9cm、幅1.7cm、最大厚0.3cm、推定直径8.0cmを測り、破断面のすべての面に研磨痕が観察される。外区に鋸歯文、その内側に櫛歯文帯を施している。内区が欠損しているため鏡種等については判断できなかった。

## 2 小 結

大原遺跡は発掘調査の結果、弥生時代中期～古墳時代中期の堅穴住居跡5棟（玉作工房跡2棟含む）、弥生時代後期～奈良時代の掘立柱建物跡15棟、横穴墓2基と遺物包含層から多量の遺物が検出された。以下、これらをテーマ別に分けて整理し、まとめとしたい。

### (1) 玉作工房跡

低丘陵の尾根上平坦面から2棟の玉作工房跡を検出した。島根県内で確認されている玉作遺跡は東は安来市から西は出雲市に至るまで広く分布しており、現在では53ヵ所が知られている。<sup>(1)</sup> 大原遺跡の所在する安来市の伯太川流域では、本遺跡を含めて、玉造遺跡、高広遺跡、健尾遺跡の4箇所が知られているが、花仙山周辺の地域では、玉湯町の史跡出雲玉作跡をはじめ41遺跡も集中している。<sup>(2)</sup> このうち発掘調査が行われたものとしては、玉湯町史跡出雲玉作跡、<sup>(3)</sup> 松江市平所遺跡、<sup>(4)</sup> 同大角山遺跡などがある。<sup>(5)</sup>

大原遺跡の玉作工房跡は、S I -01が古墳時代中期前半、S I -02が古墳時代中期後半のものであり、平面形は通常の堅穴住居跡と同一の形態をしていた。S I -01は長軸6.6m、短軸5.6mの隅丸長方形で、S I -02は一辺8mの方形を呈している。S I -01は床面に残る溝からみて、建て替えが行われたと考えられ、建て替え前の平面プランは、円形を呈するものであった。S I -02も床面上に多数のピットが穿たれており、後世の建物跡（S B -15等）の柱穴も混在しているが、建て替えの行われた可能性もある。近年の集落跡の調査によって、堅穴住居跡の平面形の変遷について、<sup>(6)</sup> ほぼ明瞭にされており、本遺跡の玉作工房跡も、当該時期の一般の堅穴住居跡と同様の形態・変遷をとるものとして捉えることができる。

2棟の工房跡の壁際で、2本の溝に挟まれた「工作用ピット」を確認した。玉作工房跡には「工作用ピット」の存在が指摘されており、平所遺跡や史跡出雲玉作跡の工房跡でも確認されている。S I -02の「工作用ピット」は、長軸1.1m、短軸0.85m、深さ44cmの長方形プランを呈するもので、底部には黄褐色粘土が貼られており、ピット内から多数の碧玉・瑪瑙の剝片が出土している。これは位置や形態が違うにしても、平所遺跡の「工作用ピット」と同じ用途のものと考えられ、攻玉の過程で重要な水に関する施設であったようである。S I -01のそれは、壁際で2本の溝に挟まれいるという点では、S I -02と同様であるが、ピットの規模等からみれば、工作用ピットの役割を果たしていたかどうか疑問である。また、これらピットの両側に対称的に走る溝については、松江市中島遺跡の工房跡にも認められるものの、それがどのような役割を果たしていたかは現時点では捉えることができず、今後の資料の増加を待って検討したい。

なお、大原遺跡の2棟の玉作工房跡では炉は検出されなかったが、S I -02の床面中央付近では焼土が認められている。平所遺跡の工房跡でも焼土等が認められており、これが工房内での照明や暖をとること以外に、水晶製玉類の発色等をよくするために、熱を加えるという役割を果たしていたと考えられ、大原遺跡では水晶は全く認められなかったが、瑪瑙にも水晶と同様の傾向があることから、熱を加えて発色や加工をしやすくしたものと思われる。

玉類は玉材として碧玉・瑪瑙・滑石がある。このうち碧玉が多くを占めていることから、碧玉を主体として玉生産が行われていたと考えられるが、このことが石材生産地との距離と関係するものなのか現時点では捉えることができなかった。碧玉は勾玉・管玉・有孔円盤未製品、瑪瑙は勾玉、滑石で白玉を製作していた。これら玉材は混在して出土しており、工房跡内の碧玉や瑪瑙の材質による作業空間の分離といったものは把握できなかった。工程別出土状況を観察すると、原石や荒割工程未製品の出土量は、さほど多く認められず、調整、研磨、穿孔未製品類が多く出土している。また、玉作工房跡の下方の遺物包含層中からは、原石や荒割工程未製品が多量に見つかっており、こうした出土状況の相違から、工程別の作業場所の存在が指摘でき、平所遺跡では玉材の分布や出土量の相違を観察した結果、原石を荒割りする工程は屋外で行われ、工房跡内では主として調整、研磨、穿孔の作業が行われたものとされており、本遺跡の工房跡にも同様の傾向が窺えるものと考えられる。次に出土状況をみると、S I -02の場合、工作用ピット周辺に未製品や剝片が集中していることに気付く。このことから、ある程度T人の作業位置が特定されるものと思われる。

このほかに注意される点として、鉄製工具の未検出と鉄滓の出土があげられる。工房跡埋土を慎重に観察したにもかかわらず、鉄製工具は一切確認できなかった。このことは工房が生産の場として廃棄される時点で、外に持ち出された可能性が考えられ、同様な例として、大角山遺跡にも認められる。鉄滓はS I -01から出土しているが、本文で述べたとおり、詳細な出土状況については把握できなかった。工房跡の立地からみて、周囲から流れ込んだとは考えられず、意図的に運び込まれた可能性がある。そうだとすれば、それが何を意味するものなのか明らかにし得なかった。床面直上やピット内からも出土していることからみれば、玉作工房跡の時期と概ね同時期と考えられ、鉢本体は検出できなかったが、県内では古く位置付けられるものである。玉湯町の出雲玉作玉ノ宮地区からも鉢が発見されていることから、今後、鉄生産との関連も考慮しながら検討していくなければならないであろう。なお、鉄滓の詳細な分析結果については、自然化学分析の項を参照されたい。

## (2) 壓穴住居跡・掘立柱建物跡

竪穴住居跡は弥生時代中期中葉～古墳時代前期のものを3棟、掘立柱建物跡は弥生時代後期～奈良時代にかけてのもの15棟を検出した。S I -05は弥生時代中期中葉のかなり大型の住居で、長軸

11.3mを測り、平面形は楕円形を呈していた。柱穴規模が小さく、壁側で直線的に並ぶことから考えれば、掘立柱建物跡の可能性もある。S I -03は弥生時代後期前半頃の住居で、平面形は円形を呈していた。これは規模を拡張して建て替えられていたが、中央ピットは床面中央に1個しか認められず、建て替え後も使用していたと考えられる。S I -04は古墳時代中期の住居で、平面形は方形を呈していた。これらも玉作工房跡と同様に住居跡平面形の変遷の中で、当該期の形態として捉えることができる。掘立柱建物跡は弥生時代中期中葉～奈良時代のもので、白コクリ遺跡同様に斜面をカットして作られていることから、ほとんどが流出しており、その一部を留めていたにすぎなかった。これらの中で注意されるのが、S B -07の存在である。弥生時代後期頃の建物跡が多い中で、これは奈良時代の建物跡であり、柱穴も他に比べれば大きなものであった。建物跡の規模等は不明であるが、約30m離れた水田の遺物包含層中から硯が出土しており、すぐにこれと結びつけるのは性急であるが、隣接する宮内遺跡からは墨書き器が出土していることから、この一帯と官衙との関連も考えられるであろう。

### (3) 横穴墓

横穴墓は2基検出しており、1号横穴墓の後背尾根上には、径約10mの後背墳丘が存在していた。1号横穴墓は白コクリ遺跡の横穴墓と同様の形態をとるもので、平入りの擬似四辻式を呈している。玄室の平面形は奥壁側がやや狭く、台形状に近い。玄室内には奥壁に沿って石棺が置かれていた。この石棺は組合せ式の横口を持たない箱形石棺で、両側石、奥壁に柱状の石材が支えとして付属しているものであった。隣接する白コクリ遺跡や宮内遺跡で検出された石棺が、すべて横口を有する中にあって、やや特異な存在と言える。2号横穴墓は小横穴で単独で存在していた。閉塞には大きめの楕円形の石を主にして、隙間を人頭大の石で塞ぎ、さらに須恵器焼片をかぶせていた。玄室内から何も出土していないことから、供獻用よりも埋葬用のものであったと判断される。

以上、簡単ではあるが大原遺跡の遺構等を概観した。安来平野での玉作遺跡の存在は從来から知られていたが、発掘調査の行われたものではなく、その実態については不明瞭であった。大原遺跡についても採集された遺物から6世紀代の玉作遺跡と推測されていたが、今回の調査で5世紀代に遡ることが判明したことは、安来平野の玉生産を知る上で貴重な成果であった。

註

- (1) 烏根県教育委員会「島根県生産遺跡分布調査報告書」IV 1987年
- (2) 前掲2と同じ
- (3) 玉湯町教育委員会「史跡出雲玉作跡発掘調査概報」 1972年
- (4) 烏根県教育委員会「国道9号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書」II 1977年
- (5) 烏根県教育委員会「大角山遺跡発掘調査報告書」 1988年
- (6) 青木遺跡発掘調査団「青木遺跡発掘調査報告書」III 1978年
- (7) 寺村光晴「古代玉作の研究」 1966年
- (8) 田中義昭他「古代金属生産の地域的特性に関する研究—山陰地方の銅・鉄を中心にして—」 1992年
- (9) 烏根県教育委員会「一般国道9号安来道路建設予定地内発掘調査報告書」IV 1993年

大原遺跡土器観察表

標記番号	写真 回数	出土地點	種類	器種	法 本	形 七	状 成	色 調	新 型
5回-1	129	床 底	土器	甕	口 径 15.0cm 高 6.6cm	1.5mmまでの白色 砂質少し含む	良好	内、外側ともに黄褐色	ヘラ削り、ヨコナギ、ナゲ、 ハケ目
5回-2	120	床 西	土器	甕	口 径 13.5cm 高 3.6cm	砂質少し含む	良好	内、外側ともに黄褐色	ヘラ削り、ヨコナギ、ハケ 目
5回-3	120	床 東	土器	甕	口 径 14.0cm 高 3.6cm	吉	良好	内、外側ともに黄褐色	ヘラ削り、ヨコナギ
5回-4	120	床 西	土器	小口甕	口 径 12.8cm 高 3.6cm	2mmまでの砂粒含 む	良好	内、外側ともに黄褐色	ヨコナギ
5回-5	120	床 西	土器	小口甕	口 径 14.4cm 高 4.3cm	8mmまでの砂粒含 む	良好	内、外側ともに黄褐色	ヨコナギ、ナゲ
5回-6	120	第 1 階 上	土器	甕	口 径 9.7cm 高 9.6cm	砂質少し含む	良好	内、外側ともに茶褐色	ナゲ、ハケ目、推測凹弧形
5回-7	120	床 西	土器	高 甕	口 径 17.8cm 高 4.7cm	3mmまでの砂粒含 む	良好	内面は黄褐色及び赤褐色、 外面は黄褐色	確認のため不明
5回-8	120	床 西	土器	高 甕	口 径 10.4cm 高 7.1cm	1mmまでの砂粒少 しある	良好	内、外側ともに黄褐色	ヘラ削り、ヨコナギ、ナゲ、 ハケ目
12回-1	122	第 2 階 土器	甕	口 径 14.8cm 高 3.6cm	吉		良好	内面は黄褐色、外面は黄褐色 (スミガラ)	ヨコナギ
12回-2	122	ピット 内 土器	鉢形器	口 径 29.4cm 高 6.3cm	4mmまでの砂粒含 む	良好	内、外側ともに黄褐色	ヨコナギ、ヘラ削き	
12回-3	122	S D - 01 内 土器	小口丸底甕	口 径 8.6cm 高 9.0cm	2mmまでの白色砂 質少し含む	良好	内、外側ともに黄褐色	ヘラ削り	
12回-4	122	S D - 02 内 土器	高 甕	深部径 10.6cm 高 5.6cm	吉		良好	深部は外、内面ともに黄褐色、 その他の部分は黄褐色	ヘラ削り、ナゲ、ハケ目
12回-5	122	床 西	土器	甕	口 径 16.0cm 最大径 29.5cm 高 39.9cm	1.5mmまでの砂粒 含む	良好	内、外側ともに黄褐色	ヘラ削り、ヨコナギ、ハケ 目
12回-6	122	ピット 内 土器	甕	口 径 12.8cm 高 5.9cm	吉		良好	内面灰褐色、外面暗褐色	円軸ヘラ削り、四軸ナゲ、 ヨコナギ
12回-7	122	第 1 階 土器	甕	口 径 12.8cm 高 3.6cm	吉		良好	内、外側ともに灰褐色	四軸ナゲ
12回-8	122	第 1 階 土器	甕	口 径 13.6cm 高 4.5cm	約 2.5mmまでの砂 質少し含む	良好	内、外側ともに灰褐色	四軸ヘラ削り、四軸ナゲ	
12回-9	122	第 1 階 土器	甕	口 径 8.8cm 高 3.7cm	吉		良好	内面灰褐色、外面灰黑色	四軸ナゲ
17回-1	124	床 西	作生土器	壺	口 径 21.8cm 高 19.8cm	砂粒子含む	良好	内、外側ともに黄褐色、黒 色の汚れ多い	ヘラ削り、ナゲ、凹線文
17回-2	124	床 西	作生土器	壺	口 径 8.5cm	粒子多く含む	良好	内、外側ともに茶褐色	ナゲ
19回-1	124	第 3 階 作生土器	壺	口 径 27.2cm 高 6.9cm	砂粒子含む	良好	内、外側ともに淡黃褐色、 黒色部分あり	ハケ目、凹線文	
19回-2	124	第 3 階 作生土器	壺	口 径 19.7cm 高 5.3cm	砂粒子含む	良好	内、外側ともに水溶色	ヨコナギ、平行波線	
19回-3	124	第 3 階 作生土器	壺	口 径 18.4cm 高 6.2cm	砂粒子含む	良好	内面は黄褐色、外面は茶褐色	ヘラ削り、ヨコナギ	
19回-4	125	壁 上 中	土器	甕	口 径 12.4cm 高 9.8cm	砂粒子含む	良好	内、外側ともに茶色、黒色 混在あり	ヘラ削り、ナゲ、ハケ目
19回-5	124	第 3 階 土器	甕	口 径 12.8cm 高 6.7cm	砂粒子含む	良好	内、外側ともに黄褐色	ヘラ削り、ヨコナギ	

標本番号	育苗用土	出土地点	種類	品種	法 量	鉢二	性成	色 形	要 約	
1964-6 125	度 中	土 部 基	桑	口 径 13.8cm 高 16.9cm	微粒子含む	良好	内、外葉とともに淡黃褐色、 黒色部分あり	ハラカリ、ナガ、ハケ目		
1964-7 125	埋 土 中	土 部 基	桑	口 径 16.0cm 高 19.1cm	微粒子含む	良好	内淡褐色、外山紫葉色	ハラカリ、ナガ、ハケ目		
1964-8 124	度 3 層	土 部 基	桑	口 径 14.5cm 高 14.8cm	微粒子含む	良好	内、外葉とともに淡黃褐色	ヘタカリ、ココナデ		
1964-9 125	埋 土 中	土 部 基	桑	口 径 15.0cm 高 21.3cm 根 高 18.4cm	3mmまでの砂粒や 多く含む	良好	内淡褐色、外深褐色(脚 部下部黒色)	ハラカリ、ヨコナデ、ハケ 目、根頭斑あり		
1964-10 125	埋 土 中	土 部 基	小形丸底桑	最大径 8.5cm 高 6.0cm	微粒子含む	良好	内、外葉とともに赤茶色(新 芽黒色)	ナガ、ハケ目、根頭斑あり		
1964-11 124	埋 土 中	土 部 基	桑	口 径 14.0cm 高 5.0cm	微粒子含む	良好	内、外葉とともに茶褐色	ナガ、ハケ目		
1964-12 124	埋 土 中	土 部 基	桑	口 径 8.0cm 高 6.0cm	微粒子含む	良好	内、外葉とともに赤茶色(新 芽黒色)	葉脈のため不明		
1964-13 125	度 3 層	上解基	桑	口 径 8.8cm 高 8.8cm	微粒子含む	良好	内、外葉とともに明茶褐色	ナガ		
2164-1 126	度 葉	野生土基	桑	口 径 28.0cm 高 1.8cm	1mmまでの砂粒少 し含む	良好	内、外葉とともに黄褐色	内縮丸		
2164-2 126	度 葉	野生土基	桑	口 径 26.0cm 高 8.7cm	2mmまでの砂粒含 む	良好	内、外葉とともに黄褐色、葉 脈あり	葉脈のため不明		
2164-3 126	度 葉	野生土基	桑	口 径 18.8cm 高 6.2cm	1mmまでの砂粒少 し含む	良好	内、外葉とともに暗黃褐色	葉脈のため不明		
2164-4 126	度 葉	野生土基	桑	口 径 15.8cm 高 11.0cm	1mmまでの砂粒含 む	良好	内淡黃褐色、外深褐色	ハケ目		
2164-5 126	度 葉	野生土基	桑	口 径 13.4cm 高 9.7cm	微	良好	内山淡黃褐色、外山紫葉色	ヨコナデ		
2164-6 126	度 葉	野生土基	桑	口 径 13.0cm 最高大径 21.0cm 根 高 28.8cm	1.5mmまでの砂粒 多く含む	良好	内葉ともに變色(尾 部黒色)、根頭斑あり	ハラカリ、ヨコナデ、ハケ 目、根頭斑あり		
2164-7 126	度 葉	野生土基	桑	最大径 17.0cm 根 高 11.4cm	微	良好	内、外葉ともに黄褐色	ヨコナデ、ヘタ書き		
2164-8 127	度 葉	野生土基	桑	最大径 16.6cm 根 高 5.1cm	2.5mmまでの砂粒 多く含む	良好	内、外葉ともに黄褐色	ヘタカリ、平行並縫		
2164-9 127	度 葉	野生土基	桑	口 径 14.0cm 最高大径 12.8cm 根 高 7.9cm	3mmまでの砂粒多 く含む	良好	内、外葉ともに暗茶色	ヨコナデ		
2264-1 127	埋 土 中	野生土基	桑	口 径 16.6cm 根 高 5.9cm	3mmまでの砂粒多 く含む	良好	内、外葉ともに茶褐色	ハラカリ、ヨコナデ、ナガ、 平行並縫		
2264-2 128	度 2 層	桑	野生土基	桑	口 径 13.6cm 高 4.1cm	1.5mmまでの砂粒 多く含む	良好	内淡黃褐色、外深褐色	葉脈のため不明	
2264-3 128	度 2 层	桑	野生土基	桑	口 径 13.6cm 高 5.3cm	1.5mmまでの砂粒 多く含む	良好	内淡黃褐色、外深褐色	ヘラカリ、ヨコナデ	
2264-4 128	度 2 层	桑	野生土基	桑	口 径 8.3cm	2.5mmまでの砂粒 多く含む	良好	内淡黃褐色、外深褐色	ヘタカリ、ヨコナデ	
2264-5 127	埋 土 中	野生土基	桑	口 径 16.2cm 最高大径 18.7cm 根 高 10.0cm	2mmまでの砂粒含 む	良好	内山淡黃褐色、外深褐色	ヘラカリ、ヨコナデ		
2264-6 128	度 2 层	桑	野生土基	桑	口 径 14.0cm 高 5.3cm	2mmまでの砂粒含 む	良好	内、外葉ともに黄褐色	葉脈のため不明	
2264-7 128	度 土 中	土 基 基	桑	口 径 10.5cm 高 3.1cm	鉢底	良好	内山淡黃褐色、外山紫葉色	ヘタカリ、ナガ		

固有番号	年月日	出土地点	層	地	地質	土	構成	色	調査
22固-9	127	東 2 層	土 砂 岩	小形丸瓦置 器 高 9.3cm	口 径 10.2cm 器 高 9.3cm	織密	良好	内、外面ともに赤茶色	ヘラ削り、ナデ、捲線伝鏡 あり
22固-10	128	埋 土 中	土 砂 岩	古 仁 墓	口 径 12.3cm 器 高 5.9cm	砂粒多きむ	良好	内、外面ともに淡黄茶色	摩滅のため不明
22固-11	128	東 2 層	中 土 砂 岩	器	口 径 8.6cm 器 高 7.2cm	砂粒多きむ	良好	内、外面ともに赤茶色	ヘラ削り、ヨコナデ
22固-12	128	埋 土 中	土 砂 岩	高 井	口 径 17.6cm 器 高 4.8cm	3.5mmまでの砂粒 多く含む	良好	内、外面ともに黄褐色	摩滅のため不明
22固-13	128	埋 土 中	土 砂 岩	高 井	口 径 9.7cm 器 高 3.9cm	織密	良好	内、外面ともに赤茶色	ナデ
22固-14	127	埋 土 中	土 砂 岩	高 井	口 径 16.5cm 器 高 6.1cm	砂粒多きむ	良好	内、外面ともに黄褐色	摩滅のため不明
22固-15	128	埋 土 中	上 部 壁	高 井	口 径 16.6cm 器 高 4.2cm	織密	良好	内、外面ともに黄褐色	ナデ
22固-16	128	東 2 層	土 砂 岩	高 井	御器置 11.6cm 器 高 2.0cm	2.5mmまでの砂粒 少しあむ	良好	内、外面ともに黄褐色	ヨコナデ、ハケ口
23固-1	129	東 2 層	海 生 土 器	器	口 径 17.8cm 器 高 4.2cm	2.5mmまでの砂粒 多く含む	良好	内、外面ともに黄褐色	ヘラ削り、ヨコナデ
23固-2	128	東 2 層	土 砂 岩	器	口 径 13.8cm 器 高 7.5cm	1mmまでの砂粒多 く含む	良好	内面黄褐色、外面青褐色。 瓦錠あり	ヘラ削り、ヨコナデ
23固-3	128	東 2 層	中 上 部 壁	小 お 壺	口 径 10.8cm 器 高 5.7cm	1.5mmまでの砂粒多 く含む	良好	内、外面ともに黄褐色（外 面に赤色顔料付）	ヘラ削り
23固-4	129	東 3 層	海 生 土 器	破 形 壷 口	最大径 15.6cm 器 高 4.2cm	2.5mmまでの砂粒 多く含む	良好	内、外面ともに黄褐色	ヨコナデ、ハラ削き
23固-5	129	東 2 層	海 生 土 器	器	口 径 21.2cm 器 高 8.7cm	3mmまでの砂粒多 く含む	良好	内面黄褐色、外面青褐色	ヨコナデ、ナデ、ヘラ削き
24固-1	129	東 3 層	海 生 土 器	器	口 径 19.6cm 器 高 4.7cm	器	良好	内、外面ともに黄褐色	ヨコナデ、ハケ口
24固-2	129	東 3 層	海 生 土 器	器	口 径 19.6cm 器 高 7.0cm	2mmまでの砂粒多 く含む	良好	内面暗黄色、外面暗黄褐色	摩滅のため不明
24固-3	129	東 3 層	海 生 土 器	器	口 径 13.6cm 器 高 3.9cm	3mmまでの砂粒多 く含む	良好	内面灰褐色、外面暗褐色	ヨコナデ、平行沈錠
24固-4	129	東 3 層	海 生 土 器	器	口 径 18.8cm 器 高 4.8cm	2mmまでの砂粒多 く含む	良好	内、外面ともに暗褐色	ヘラ削り、ヨコナデ、ヘラ 削き
24固-5	129	東 3 層	海 生 土 器	器	口 径 15.4cm 器 高 6.5cm	2mmまでの砂粒多 く含む	良好	内面暗黃褐色、外面暗褐色	ヘラ削り、ヨコナデ
24固-6	129	東 2 層	上 部 壁	小形丸瓦置 器	口 径 6.6cm 器 高 4.4cm	1mmまでの砂粒や や多く含む	良好	内面黄褐色、外面青褐色	捲線伝鏡あり
24固-7	129	東 2 層	海 生 土 器	破 形 壷 口	口 径 15.8cm 器 高 4.8cm	1.5mmまでの砂粒多 く含む	良好	内面褐色、外面青褐色	ヘラ削り、ヨコナデ、平行 沈錠
24固-8	129	東 2 層	海 生 土 器	破 形 壷 口	口 径 10.0cm 器 高 7.0cm	3mmまでの砂粒多 く含む	良好	内、外面ともに暗褐色	ヘラ削り、平行沈錠
24固-9	129	S B -08灰陶	土 砂 岩	牙	口 径 16.0cm 器 高 11.9cm 器 高 11.0cm	織密	良好	内、外面ともに赤茶色	ナデ、ハケ口
27固-1	130	東	青 土 砂 岩	土 製 支 鋼	御器置 12.6cm 器 高 3.6cm	2.5mmまでの砂粒 多く含む	良好	内、外面ともに黄褐色	トゲ、削痕（崩あり）
27固-2	130	東	青 土 砂 岩	壇 の 底 平		1mmまでの砂粒多 く含む	良好	内、外面ともに黄褐色	ヘラ削り
27固-3	130	埋 土 中	海 生 土 器	器	口 径 16.9cm 器 高 4.5cm	致密	良好	内、外面ともに黄褐色	ヘラ削り、ヨコナデ、ハケ 口

標識番号	管轄区域	市土地点	種類	名前	法式	輪	地成	色	備考
27回-4	130	東上中	衛生土源	便	口 径 12.8cm 器 高 3.5cm	無縫子食む	良好	内、外面とともに明赤茶色	ナゲ、平行状態
27回-5	130	堆土中	土築基盤	便	口 径 1.8cm 器 高 3.7cm	やや粗	やや不良	内、外面ともに茶褐色	ハケ目
27回-6	130	堆土中	土築基盤	便	口 径 17.5cm 器 高 4.4cm	無縫子食む	良好	内、外面とともに淡桃褐色	ヘラ割り、ナゲ
27回-7	130	堆土中	衛生土源	便	口 径 15.5cm 器 高 4.7cm	無縫	良好	内、外面ともに灰色	凹凸ナゲ
27回-8	130	堆土中	衛生土源	便	口 径 2.8cm 器 高 9.5cm	無縫、微粒不含む	良好	内、外面ともに淡灰色	凹凸ナゲ、平行状態
27回-9	130	床山	衛生土源	便	口 径 9.8cm 器 高 5.3cm	1mmまでの砂粒含む	良好	黄灰茶色	ナゲ
30回-1	131	第2層	衛生土源	便	口 径 13.4cm 器 高 2.9cm	無縫	良好	内、外面ともに灰色	凹凸ナゲ割り、凹凸ナゲ、ナゲ
30回-2	131	第2層	衛生土源	便	口 径 12.9cm 器 高 2.6cm	無縫	良好	内、外面ともに灰色	凹凸ナゲ割り、凹凸ナゲ
30回-3	131	第2層	衛生土源	便	口 径 12.1cm 器 高 2.6cm	無縫	良好	内、外面ともに灰色	凹凸ナゲ割り、凹凸ナゲ、ナゲ
30回-4	131	第2層	衛生土源	便	口 径 9.2cm 器 高 1.9cm	無縫	良好	内、外面ともに灰色	凹凸ナゲ割り、凹凸ナゲ、ナゲ
30回-5	131	第2層	衛生土源	便	口 径 15.3cm 器 高 1.9cm	無縫	良好	内、外面ともに灰色	ナゲ
30回-6	131	第2層	衛生土源	便	口 径 11.6cm 器 高 4.0cm	無縫	良好	内、外面ともに灰色	凹凸ナゲ、ナゲ
30回-7	131	第2層	衛生土源	杯身	口 径 13.1cm 器 高 3.9cm	無縫	良好	内、外面ともに灰色	ナゲ
30回-8	131	第2層	衛生土源	杯身	口 径 12.5cm 器 高 3.6cm	無縫	良好	内面淡灰色、外表面淡灰色	凹凸ナゲ
30回-9	131	第2層	衛生土源	高台付外	口 径 8.3cm 器 高 2.1cm	無縫	やや不良	内、外面ともに淡灰色	ナゲ
30回-10	131	第2層	衛生土源	高台付外	口 径 8.6cm 器 高 2.7cm	無縫	良好	内、外面ともに灰色	ナゲ
30回-11	131	第2層	衛生土源	長筒	口 径 8.3cm 器 高 8.3cm	無縫	良好	内、外面ともに灰色	ナゲ
30回-12	131	第2層	衛生土源	便	口 径 23.8cm 器 高 3.6cm	無縫	良好	内、外面ともに灰色	凹凸ナゲ
30回-13	131	第2層	土築基盤	便	口 径 26.0cm 器 高 6.6cm	無縫	良好	内、外面ともに淡黄色	ナゲ
32回-1	132	堆土中	土築基盤	便	口 径 26.0cm 器 高 7.0cm	無縫子食む	良好	内面淡茶褐色、外表面茶色	ハク割り、ヨコナゲ、ハケ目
32回-2	132	堆土中	上部土	土壤支撑	長さ 11.6cm	無縫子食む	良好	明赤茶色	厚感のため不利
37回-1	132	玄室内	衛生土源	便	口 径 11.3cm 器 高 3.7cm	密	良好	内、外面ともに暗灰色	凹凸ナゲ、静止ナゲ
37回-2	132	玄室内	衛生土源	便	口 径 11.9cm 器 高 4.4cm	密	良好	内、外面ともに灰色	凹凸ナゲ、静止ナゲ
37回-3	132	玄室内	衛生土源	便	口 径 9.6cm 器 高 4.2cm	密	良好	内、外面ともに灰色	ハク割り、凹凸ナゲ、ナゲ、静止ナゲ
37回-4	132	玄室内	衛生土源	杯身	口 径 7.8cm 器 高 10.4cm 器 長 3.8cm	密	良好	内、外面ともに淡灰色	ハク割り、凹凸ナゲ、ナゲ、静止ナゲ

標本番号	学名	出土地点	種類	形態	法	風	断土	地城	色調	属
37E-5	132	北 室 内	真 灰 壁	長 流 波	口 頭 高 7.9cm 幅 19.6cm 底 5.9cm	1~2mmの白 色砂粒含む	良好	内側灰褐色、外側暗灰色	回転ヘラ削り、回転ナゲ	
37E-6	132	北 室 内	真 灰 壁	無 花 壁	口 頭 高 7.9cm 幅 17.2cm 底 5.9cm	1~2mmの白 色砂粒含む	良好	内、外面ともに灰褐色	回転ヘラ削り、回転ナゲ	
37E-7	133	北 室 内	真 灰 壁	無 花 壁	口 頭 高 7.1cm 幅 16.0cm 底 4.2cm	1~2mmの白 色砂粒含む	良好	内、外面ともに灰褐色	回転ヘラ削り、回転ナゲ	
37E-8	133	北 室 内	真 灰 壁	無 花 壁	口 頭 高 8.5cm 幅 12.6cm	微粒子含む	良好	内、外面ともに灰褐色	回転ヘラ削り、回転ナゲ、 カキ目	
37E-9	133	北 室 内	須 点 壁	無 花 壁	J 頭 高 8.5cm 幅 18.5cm	微粒子含む	良好	内、外面ともに灰褐色	回転ナゲ	
37E-10	133	北 室 内	真 灰 壁	無 花 壁	口 頭 高 15.0cm 幅 16.7cm 底 10.7cm	微粒、微粒子含む	良好	内、外面ともに灰褐色	回転ナゲ、ナゲ	
37E-11	133	新 開 部	真 灰 壁	無 花 壁	口 頭 高 13.7cm 幅 10.6cm 底 10.9cm	細密、微粒子含む	良好	内、外面ともに灰褐色	回転ナゲ、ナゲ、平行沈積	
37E-12	133	北 室 内	真 灰 壁	無 花 壁	口 頭 高 10.7cm 幅 14.3cm 底 9.8cm	微粒子含む	良好	内、外面ともに灰褐色	回転ナゲ、ナゲ	
40E-1	134	新 開 部	酒 香 壁	無 花 壁	J 頭 高 22.4cm 幅 18.5cm	微粒子含む	良好	内、外面ともに灰白色	ヨコナゲ、タキ	
42E-1	135	東 下 層	共生土器	無 花 壁	J 頭 高 22.2cm 最大径 27.8cm 幅 25.1cm 底 11.3cm	4mmまでの砂粒少 し含む	良好	内、外面ともに淡黄褐色	ヨコナゲ、ハケ目	
42E-2	135	東 4 層	共生土器	無 花 壁	口 頭 高 17.4cm 幅 7.0cm	1mmまでの砂粒多 く含む	良好	内、外面ともに灰白色	ハケ目	
42E-3	135	東 4 层	共生土器	無 花 壁	口 頭 高 16.0cm 幅 8.3cm	1mmまでの砂粒少 し含む	良好	内面淡黄色、外面深暗黄色	ヨコナゲ、ハケ目	
42E-4	135	東 4 层	共生土器	無 花 壁	口 頭 高 17.4cm 幅 3.7cm	1.5mmまでの砂粒 含む	良好	内、外面ともに灰白色	摩滅のため不明	
42E-5	135	東 2 层	共生土器	無 花 壁	J 頭 高 14.5cm 幅 5.6cm	1mmまでの砂粒多 く含む	良好	内面黄白色、外面暗黄色	ヨコナゲ、ハケ目、平行沈 積、指標圧痕あり	
42E-6	135	東 2 层	共生土器	無 花 壁	茎 高 9.7cm 底 径 4.6cm	2.5mmまでの白色 砂粒含む	良好	内面黄褐色、外面暗黄色 (風化)	ハケ目、ヘラ削き	
42E-7	135	東 2 层	共生土器	無 形 土 器	J 頭 高 8.4cm 最大径 15.4cm 幅 8.3cm	1mmまでの砂粒含 む	良好	内面淡青褐色、外面暗黃褐色 (底色の薄付着)	ヨコナゲ、ハケ目、平行沈 積、指標圧痕あり	
42E-8	135	東 下 層	共生土器	無 花 壁	無 大 径 高 11.2cm 幅 10.3cm 底 6.1cm	2mmまでの砂粒含 む	良好	内、外面ともに白褐色	ヨコナゲ、ハケ目、ヘラ削 き	
43E-1	136	東 2 层	共生土器	無 花 壁	口 頭 高 19.8cm 幅 9.1cm	微粒子含む	良好	内、外面ともに灰褐色	ヨコナゲ、ハケ目、平行沈 積、指標圧痕あり	
43E-2	137	森 下 層	共生土器	無 花 壁	口 頭 高 16.8cm 幅 8.3cm	2.5mmまでの砂粒 含む	良好	内面褐色、外面暗褐色	ヘラ削り、ヨコナゲ、ナゲ、 ヘラ削き	
43E-3	136	東 4 层	共生土器	無 花 壁	口 頭 高 26.0cm 幅 7.0cm	微粒子含む	良好	内、外面ともに淡灰褐色	ヘラ削り、ナゲ、平行沈積、 ヘラ削き	
43E-4	136	東 1 层	共生土器	無 花 壁	口 頭 高 16.5cm 幅 7.0cm	微粒子含む	良好	内面淡白褐色、外面淡茶褐 色	ヘラ削り、ナゲ、平行沈積、 指標圧痕あり	
43E-5	136	東 2 层	共生土器	無 花 壁	J 頭 高 13.7cm 幅 3.5cm	粒子含む	良好	内、外面ともに明黄褐色	ヘラ削り、ナゲ、平行沈積	
43E-6	136	東 3 层	共生土器	無 花 壁	口 頭 高 14.5cm 幅 4.0cm	1mmまでの白色砂 粒多く含む	良好	内、外面ともに淡褐色	ヨコナゲ、指標圧痕あり	
43E-7	136	東 3 层	共生土器	無 花 壁	口 頭 高 20.0cm 幅 3.5cm	2.5mmまでの白色 砂粒含む	良好	内、外面ともに淡褐色	ヨコナゲ	
43E-8	136	東 2 层	共生土器	無 花 壁	口 頭 高 16.0cm 幅 3.5cm	1.5mmまでの砂粒 含む	良好	内、外面ともに黄褐色	ヨコナゲ	

試験番号	測定部位	測定地点	種類	基準	断面	断面上	形状	色調	特徴
43周-9	137	第 3 周	弥生土器	直	口 径 21.6cm 厚 度 6.2cm	輪狀孔有り	良好	内、外面ともに淡白色、 外頭に淡褐色部分あり	ヘラ削り、ナゲ、平行沈線
43周-10	137	第 3 周	弥生土器	直	口 径 18.6cm 厚 度 6.0cm	輪狀孔有り	良好	内、外面ともに淡灰白色	ヘラ削り、ナゲ、平行沈線
43周-11	137	第 3 周	弥生土器	直	口 径 16.4cm 厚 度 4.7cm	2mmまでの砂粒有 り	良好	内面暗褐色、外表面褐色	ヘラ削り、ヨコナデ
43周-12	136		弥生土器	直	口 径 22.4cm 厚 度 6.4cm	3mmまでの白色砂 粒多く含む	良好	内、外面ともに黑色	ヘラ削り、ヨコナデ
43周-13	136	第 4 周	弥生土器	直	口 径 15.8cm 厚 度 6.0cm	3mmまでの白色砂 粒多く含む	良好	内面暗褐色、外表面褐色	ヘラ削り、ヨコナデ、平行 沈線
43周-14	136	第 2 周	弥生土器	直	口 径 26.8cm 厚 度 5.5cm	1~2mm前後の石 灰、黄褐色の白子有 り	良好	内面暗褐色、外表面褐色	ヘラ削り、ヨコナデ
43周-15	137		弥生土器	直	口 径 30.0cm 厚 度 16.0cm	4mmまでの砂粒多 く含む	良好	内面暗褐色、外表面褐色	ヘラ削り、平行沈線
44周-1	138	第 2 周	弥生土器	直	口 径 20.0cm 厚 度 5.0cm	2.5mmまでの砂粒 多く含む	良好	内面暗褐色、外表面褐色	ヘラ削り、ヨコナデ
44周-2	137	第 2 周	弥生土器	直	口 径 14.0cm 厚 度 4.7cm	2mmまでの砂粒含 む	良好	内面暗褐色、外表面褐色	ヨコナデ
44周-3	137		弥生土器	直	口 径 16.0cm 厚 度 3.5cm	2mmまでの砂粒含 む	良好	内面暗褐色、外表面褐色 及び褐色	ヘラ削り、ヨコナデ
44周-4	139		弥生土器	直	口 径 16.4cm 厚 度 5.0cm	2mmまでの白色砂 粒有り	良好	内面暗褐色、外表面褐色	ヘラ削り、ヨコナデ、ヘラ 削き
44周-5	138	第 3 周	弥生土器	直	口 径 21.4cm 厚 度 3.7cm	2.5mmまでの砂粒 多く含む	良好	内面褐色、外表面褐色	ヘラ削り、ヨコナデ、平行 沈線
44周-6	137	第 3 周	弥生土器	直	口 径 26.4cm 厚 度 4.2cm	1.5mmまでの砂粒 含む	良好	内面暗褐色、外表面褐色	ヨコナデ
44周-7	137	第 3 周	弥生土器	直	口 径 21.0cm 厚 度 4.7cm	1mmまでの砂粒少 し含む	良好	内面褐色(一部黑色)、外 表面褐色	ヘラ削り、ヨコナデ、ヘラ 削き
44周-8	138	第 2 周	弥生土器	直	口 径 21.8cm 厚 度 7.4cm	3mmまでの白色砂 粒多く含む	良好	内、外面ともに暗褐色	ヘラ削り、ヨコナデ
44周-9	138	第 3 周	弥生土器	直	口 径 20.4cm 厚 度 4.6cm	2mmまでの砂粒多 く含む	良好	内面暗褐色、外表面褐色(ス ヌ付着)	ヘラ削り、ヨコナデ
44周-10	139	第 4 周	弥生土器	直	口 径 15.8cm 厚 度 4.6cm	1.5mmまでの白色 砂粒含む	良好	内、外面ともに暗褐色	ヘラ削り
44周-11	138	第 2 周	弥生土器	直	口 径 15.3cm 厚 度 4.7cm	1mmまでの砂粒含 む	良好	内面暗褐色、外表面褐色	ヘラ削り、ヨコナデ
44周-12	138	第 2 周	弥生土器	輪形器	輪部径 4.8cm 厚 度 4.8cm	2mmまでの砂粒多 く含む	良好	内、外面ともに暗褐色(外 面に赤褐色剥離)	ヘラ削り、ヨコナデ、ヘラ 削き
44周-13	138	第 4 周	弥生土器	輪形器	口径 17.6cm 厚 度 5.6cm	1mmまでの砂粒少 し含む	良好	内面暗褐色、外表面褐色	ヨコナデ、ヘラ削き
44周-14	138		弥生土器	輪形器	輪部径 18.4cm 厚 度 8.6cm	3mmまでの砂粒多 く含む	良好	内、外面ともに暗褐色	ヘラ削り、ヨコナデ、ヘラ 削き
44周-15	138	第 2 周	弥生土器	輪形器	輪部径 17.2cm 厚 度 5.6cm	3mmまでの白色砂 粒多く含む	良好	内面暗褐色、外表面褐色 (赤褐色剥離)	ヘラ削り、ヨコナデ、平行 沈線
44周-16	138	最 下 周	弥生土器	輪形器	輪部径 16.0cm 厚 度 4.5cm	1.5mmまでの砂粒 含む	良好	内面暗褐色、外表面褐色(一 部黑色)	ヘラ削り、ヨコナデ、ヘラ 削き
44周-17	139	第 2 周	弥生土器	輪形器	輪部径 17.4cm 厚 度 6.5cm	1.5mmまでの砂粒含 む	良好	内面暗褐色及び暗褐色、外 表面褐色及び暗褐色	ヘラ削り、ヨコナデ
45区-1	139		上 箸 器	直	口 径 23.6cm 厚 度 6.8cm	3mmまでの砂粒含 む	良好	内面暗褐色、外表面褐色	ヘラ削り

標本番号	写真 回数	出土地点	種類	品種	法 生	茎 上	花	色 調	説 明
45E-2	139	第 1 層 上部 帯	茎	口 径 12.3cm 基 高 6.0cm	3mmまでの砂粒少 し含む	良好 内、外面ともに暗黄色	ヨコナダ、ハゲ目、根頭压 痕あり		
45E-3	139	第 2 層 土 葉 等	茎	口 径 13.2cm 基 高 6.5cm	1.5mmまでの砂粒多 く含む	良好 内面淡褐色、外山淡黄色	ヘラ割り、ハケ目		
45E-4	139	第 4 層 土 葉 等	茎	口 径 14.8cm 基 高 5.4cm	2mmまでの砂粒多 く含む	良好 内、外面ともに暗褐色	ヘラ割り、ヨコナダ		
45E-5	139	第 2 層 上部 帯	茎	口 径 17.0cm 基 高 5.5cm	1mmまでの砂粒多 く含む	良好 内、外面ともに白茶色	ヘラ割り、ヨコナダ		
45E-6	140	第 3 層 土 葉 等	茎	口 径 11.4cm 基 高 3.6cm	1.5mmまでの砂粒多 く含む	良好 内、外面ともに黄白色	摩滅のため不明		
45E-7	140	第 3 层 土 葉 等	茎	口 径 16.4cm 基 高 5.0cm	3mmまでの砂粒多 く含む	良好 内面淡褐色及び黒褐色、外 山淡褐色	ヘラ割り、ヨコナダ、指圧 痕あり		
45E-8	139	第 3 层 上部 帯	茎	口 径 22.0cm 基 高 29.5cm	強烈子含む	良好 内、外面ともに暗茶色	ヘラ割り、ヨコナダ、ハゲ 目		
45E-9	140	第 2 层 土 葉 等	枝形器 台	脚部径 25.0cm 基 高 7.4cm	1mmまでの砂粒少 し含む	良好 内、外面ともに黃褐色	ヘラ割り		
45E-10	140	第 2 层 土 葉 等	枝形器 台	脚部径 18.0cm 基 高 5.8cm	2mmまでの砂粒多 く含む	良好 内、外面ともに淡黄色	摩滅のため不明		
46E-1	140	第 3 层 土 葉 等	-	口 径 16.0cm 基 高 3.2cm	2mmまでの砂粒や 多く含む	良好 内、外面ともに黃褐色	摩滅のため不明		
46E-2	140		土 葉 等	口 径 14.4cm 基 高 3.7cm	1mmまでの砂粒多 く含む	良好 内、外面ともに淡褐色	ヨコナダ		
46E-3	140	第 3 层 土 葉 等	茎	口 径 13.6cm 基 高 5.3cm	強烈子含む	良好 内、外面ともに白茶色	ヘラ割り、ヨコナダ、ナデ		
46E-4	140	第 4 层 土 葉 等	茎	口 径 18.0cm 基 高 6.5cm	2.5mmまでの砂粒 含む	良好 内、外面ともに淡褐色(外 面にスス付着)	ヘラ割り、ヨコナダ、ナデ		
46E-5	140		土 葉 等	口 径 16.0cm 基 高 5.0cm	2mm前後の白色砂 粒含む	不良 内、外面ともに茶褐色	摩滅のため不明		
46E-6	140	第 2 层 土 葉 等	茎	口 径 15.0cm 基 高 5.0cm	1mm前後の砂粒少 し含む	良好 内、外面ともに淡褐色	ヨコナダ		
46E-7	140	第 2 层 土 葉 等	茎	口 径 15.0cm 基 高 12.5cm	強烈子含む	良好 内、外面ともに白茶色	ヘラ割り、ナデ、ハケ目		
46E-8	141	第 4 层 土 葉 等	茎	口 径 22.0cm 基 高 4.3cm	1mm前後の白色砂 粒含む	良好 内、外面ともに淡褐色	ヨコナダ		
46E-9	141	第 2 层 土 葉 等	茎	口 径 23.0cm 基 高 4.6cm	1mmまでの白色小 砂粒含む	やや 不良 内、外面ともに褐色	ヨコナダ		
46E-10	141	第 2 层 土 葉 等	茎	口 径 16.0cm 基 高 7.5cm	2mmまでの砂粒多 く含む	良好 内、外面ともに強褐色	ヘラ割り、ヨコナダ		
46E-11	141	第 3 层 土 葉 等	茎	口 径 18.0cm 基 高 6.0cm	強烈子含む	良好 内、外面ともに淡茶色	ヘラ割り、ヨコナダ、ナデ		
46E-12	141		土 葉 等	口 径 20.0cm 基 高 5.4cm	2.5mmまでの砂粒 含む	良好 内、外面ともに白茶色	ヘラ割り、ヨコナダ		
46E-13	141	第 4 层 土 葉 等	茎	口 径 17.2cm 基 高 6.0cm	3mmまでの砂粒少 し含む	良好 内、外面ともに薄茶色(外 面にスス付着)	ヘラ割り、ヨコナダ		
46E-14	141	第 2 层 土 葉 等	茎	口 径 15.0cm 基 高 8.3cm	2mmまでの砂粒多 く含む	良好 内面淡褐色、外面黃褐色	ヘラ割り、ヨコナダ、ナデ、 ハケ目		
46E-15	141		土 葉 等	口 径 16.0cm 基 高 4.0cm	1mmまでの砂粒少 し含む	良好 内、外面ともに淡褐色	ヨコナダ		
46E-16	141	第 4 层 土 葉 等	茎	口 径 17.0cm 基 高 7.5cm	1mmまでの砂粒少 し含む	良好 内面淡褐色、外面黑色	ヘラ割り、ヨコナダ、ナデ、 ハケ目		

地図番号	測量	出土地点	層	分類	法 延	幅 度	地 土	塊成	色 調	測 定
46回-17	141		土 砂	底	口 径 15.6cm 基 高 6.3cm	1.5mまでの砂粒 含む	良好	内、外観ともに暗褐色	ヘラ刷り、ヨコナデ	
46回-18	142	第 4 層	上 部 砂	底	口 径 33.5cm 基 高 5.7cm	1mm前後の白色小 砂粒多く含む	良好	内、外観ともに淡褐色	ヘラ刷り、ヨコナデ	
47回-1	142		土 砂	底	口 径 15.6cm 基 高 5.7cm	底	良好	内、外観ともに淡褐色	ヘラ刷り、ヨコナデ、ハケ 目	
47回-2	142	第 2 層	土 砂	底	口 径 12.8cm 基 高 5.1cm	1mmまでの白色小 砂粒、石英少しある	良好	内、外観ともに暗褐色	ヨコナデ	
47回-3	142	第 2 層	土 砂	底	口 径 12.8cm 基 高 4.0cm	2mmまでの石英、 黄泥少しある	やや 不良	内、外観ともに暗褐色	ヨコナデ	
47回-4	143	第 2 層	土 砂	小 形 底	口 径 10.6cm 基 高 3.7cm	3mmまでの砂粒含 む	良好	内、外観ともに黃褐色	ヘラ刷り、ヨコナデ、ハケ 目	
47回-5	143	第 2 層	土 砂	底	口 径 11.6cm 基 高 9.3cm	3mmまでの砂粒多 く含む	良好	内、外観ともに褐色	厚膜のため不明	
47回-6	143	第 3 層	土 砂	小 形 底	口 径 12.6cm 基 高 7.3cm	3mmまでの砂粒多 く含む	良好	内、外観ともに暗褐色	ヘラ刷り、ヨコナデ、ハケ 目	
47回-7	143	第 2 層	土 砂	小 形 底	口 径 13.2cm 基 高 16.3cm	5mmまでの砂粒含 む	良好	内面淡褐色、外面暗黄色	厚膜のため不明	
47回-8	142		上 部 砂	底	口 径 13.7cm 基 高 9.8cm	2mmまでの砂粒含 む	良好	内、外観ともに暗褐色	ヘラ刷り、ヨコナデ、ハケ 目	
47回-9	142		土 砂	底	口 径 12.0cm 基 高 10.6cm	底	良好	内、外観ともに淡褐色	ヘラ刷り、ヨコナデ、ハケ 目	
47回-10	142	第 4 層	土 砂	底	口 径 16.8cm 基 高 9.3cm	1mmまでの砂粒少 し含む	良好	内、外観ともに淡褐色	ヘラ刷り、ヨコナデ	
47回-11	142	第 2 層	上 部 砂	底	口 径 15.6cm 基 高 8.3cm	2.5mmまでの砂粒 含む	良好	内、外観ともに淡褐色	ヘラ刷り、ヨコナデ、ハケ 目	
47回-12	142	第 3 層	土 砂	小 形 底	口 径 10.6cm 基 高 8.3cm	4mmまでの白色小 砂粒多く含む	良好	内面淡褐色、外面暗褐色	ヘラ刷り、ヨコナデ、ハケ 目	
47回-13	142	第 2 層	土 砂	底	口 径 14.6cm 基 高 6.6cm	3mmまでの砂粒多 く含む	良好	内、外観ともに暗褐色	厚膜のため不明	
47回-14	143		上 部 砂	底	口 径 16.2cm 基 高 14.5cm	底	良好	内、外観ともに暗褐色	ヘラ刷り、ヨコナデ	
47回-15	143		上 部 砂	底	口 径 18.6cm 基 高 8.2cm	2mmまでの砂粒含 む	良好	内面淡褐色、外面淡褐色	ヘラ刷り、ヨコナデ	
47回-16	143		上 部 砂	底	口 径 15.8cm 基 高 11.3cm	砂粒含む	良好	内、外観ともに茶褐色	ヘラ刷り、ヨコナデ、ハケ 目	
47回-17	143	第 4 層	土 砂	底	口 径 17.0cm 基 高 8.0cm	2mmまでの砂粒含 む	良好	内、外観ともに暗褐色	ヘラ刷り、ヨコナデ、ハケ 目	
47回-18	144	第 2 層	土 砂	底	口 径 18.6cm 基 高 10.0cm	2mmまでの砂粒含 む	良好	内、外観ともに暗褐色	ヘラ刷り、ヨコナデ、ハケ 目	
48回-1	144	第 4 層	土 砂	底	口 径 10.8cm 基 高 5.6cm	1.5mmまでの砂粒 含む	良好	内、外観ともに暗褐色（一 部黒色）	ヨコナデ、ハケ目	
48回-2	144	第 2 層	上 部 砂	底	口 径 17.3cm 基 高 6.1cm	1mmまでの砂粒含 む	良好	内面淡褐色、外面黃褐色	ハケ目	
48回-3	144	第 2 層	土 砂	底	口 径 17.8cm 基 高 9.4cm	2mmまでの砂粒含 む	良好	内、外観ともに暗褐色	厚膜のため不明	
48回-4	144	第 4 層	土 砂	底	口 径 16.4cm 基 高 12.3cm	3mmまでの砂粒含 む	良好	内、外観ともに淡褐色	ナダ、ハケ目、ヘラ刷り	
48回-5	145		土 砂	底	口 径 15.8cm 基 高 9.7cm	圓柱含む	良好	内、外観ともに茶褐色	ハケ目	

標印番号	当番 地名	出土地点	種類	器種	法 尺	地 土	焼成	色 調	特 徴	
48回-6	144	第 4 層	三脚 席	高 珍	口 径 16.4cm 器 高 5.4cm	2.5mmまでの砂粒 含む	良好	内、外面ともに褐色 赤茶色	ヨコナギ、ナデ、ハケ目 ハケ月、ヘラ磨き	
48回-7	145		上脚 四	高 珍	口 径 16.0cm 器 高 7.0cm	2mmまでの砂粒含 む	良好	内、外面ともに赤褐色 赤茶色	ハケ月、ヘラ磨き	
48回-8	144	第 2 層	土 領 岩	高 珍	口 径 17.8cm 器 高 9.0cm	5mmまでの砂粒多 く含む	良好	内、外面ともに棕褐色 褐色	摩滅のため不明	
48回-9	144	第 3 層	土 領 岩	高 珍	口 径 19.0cm 器 高 5.8cm	5mmまでの砂粒多 く含む	良好	内、外面ともに黄褐色 褐色	摩滅のため不明	
48回-10	144	第 2 层	海 上 脚	高 珍	口 径 12.0cm 器 高 5.5cm	1mm程度の石片 長石含む	良好	内、外面ともに黄褐色 褐色	摩滅のため不明	
48回-11	145	第 4 层	土 領 岩	高 珍	脚部径 器 高 5.1cm	9.0cm	葉粒子含む	良好	内、外面ともに復明茶色 褐色	
48回-12	145	第 2 层	土 領 岩	高 珍	脚部径 器 高 5.5cm	2mmまでの砂粒含 む	良好	内、外面ともに棕褐色 褐色	摩滅のため不明	
48回-13	144	第 3 层	土 領 岩	高 珍	11 口 径 12.0cm 器 高 3.0cm	2mmまでの砂粒多 く含む	良好	内、外面ともに褐色 褐色	摩滅のため不明	
48回-14	144	第 2 层	土 領 岩	高 珍	脚部径 器 高 6.2cm	2.1cm	1mmまでの砂粒含 む	良好	内、外面ともに淡褐色 褐色	
48回-15	145	第 2 层	土 領 岩	低 珍	脚部径 器 高 7.8cm	3.4cm	1mmまでの砂粒少 し含む	良好	内、外面ともに灰褐色 褐色	
48回-16	145	第 2 层	土 領 岩	低 珍	脚部径 器 高 8.2cm	4.1cm	2mmまでの砂粒含 む	良好	内、外面ともに黄褐色 褐色	
48回-17	145	第 4 层	土 領 岩	高 珍	口 径 16.0cm 器 高 7.0cm	2mmまでの砂粒含 む	良好	内、外面ともに棕褐色 褐色	ヘラ削り、ヘラ磨き	
48回-18	145	第 2 层	土 領 岩	高 珍	受脚部 器 高 8.0cm	8.8cm 10.2cm 7.2cm	1mmまでの砂粒含 む	良好	内面暗灰色(受脚部褐色) 外表面褐色	摩滅のため不明
48回-19	146		土 領 岩	小形丸底珍	口 径 5.8cm 器 高 6.0cm	微粒子含む	良好	内、外面ともに茶色 褐色	摩滅のため不明	
48回-20	146	第 3 层	土 領 岩	小形丸底珍	口 径 9.0cm 器 高 7.4cm	微粒	良好	内、外面ともに暗茶色 褐色	ヘラ削り、ナデ、指擦痕 あり	
48回-21	146	第 3 层	土 領 岩	小形丸底珍	口 径 9.0cm 器 高 7.6cm	粒子含む	良好	内、外面ともに茶色(一等 薄黑色)	ヘラ削り、ナデ	
48回-22	146	第 3 层	土 領 岩	小形丸底珍	口 径 8.4cm 器 高 8.5cm	粒子含む	良好	内、外面ともに赤茶色 褐色	ナデ、指擦痕あり	
48回-23	146	第 2 层	土 領 岩	小形丸底珍	口 径 6.3cm 器 高 5.8cm	粒子含む	良好	内、外面ともに淡赤茶色 褐色	ナデ、指擦痕あり	
48回-24	146	第 2 层	土 領 岩	小形丸底珍	口 径 8.0cm 器 高 6.8cm	粒子含む	良好	内、外面ともに淡茶褐色 褐色	ヘラ削り、ナデ	
48回-25	146	第 4 层	三脚 席	小形丸底珍	口 径 8.0cm 器 高 6.9cm	微粒子含む	良好	内、外面ともに淡茶色 褐色	ナデ、指擦痕あり	
48回-26	146	第 3 层	海 上 脚	小形丸底珍	口 径 8.4cm 器 高 6.8cm	粒子含む	良好	内、外面ともに茶色 褐色	摩滅のため不明	
48回-27	146	第 3 层	海 上 脚	小形丸底珍	口 径 6.8cm 器 高 4.7cm	微粒子含む	良好	内、外面ともに淡茶褐色 褐色	ナデ、指擦痕あり	
48回-28	145	第 4 层	土 領 岩	小形丸底珍	最大径 器 高 12.0cm 9.0cm	1mmまでの砂粒含 む	良好	内、外面ともに淡茶色 褐色	ヘラ削り、ナデ、指擦痕 あり	
49回-1	147	第 3 层	須 比 谷	壺	11 口 径 13.0cm 器 高 4.7cm	中中等	良好	内面灰褐色、外表面黄色 褐色	凹部へ剥り、凹部ナデ、 滑走ナデ	
49回-2	147	第 2 层	須 比 谷	壺	口 径 12.0cm 器 高 5.8cm	壺	良好	内面淡褐色、外表面黄色 褐色	凹部へ剥り、凹部ナデ、 滑走ナデ	

調査番号	写真 枚数	出土地点	種類	基盤	法 目	基 上	地成	地 質	測 定
49回-3	147		酒器	壺	口 径 12.3cm 高 5.0cm	やや密	良好	内山黄灰色、外側灰褐色(内 面無付着)	圓軸へラ削り、圓軸ナダ、 静止ナダ
49回-4	147	第 3 潟	酒器	壺	口 径 12.6cm 高 5.6cm	密	良好	内側灰白色、外側灰褐色	圓軸へラ削り、圓軸ナダ、 静止ナダ
49回-5	147	第 2 潟	酒器	壺	口 径 13.4cm 高 5.1cm	やや粗	良好	内側灰褐色、外側青灰色	玉軸へラ削り、圓軸ナダ、 静止ナダ
49回-6	147	第 3 潟	酒器	壺	口 径 13.2cm 高 4.8cm	密	良好	内側灰白色、外側灰褐色	圓軸へラ削り、圓軸ナダ、 静止ナダ
49回-7	147	第 3 潟	酒器	壺	口 径 12.9cm 高 4.4cm	密	良好	内側灰褐色、外側灰褐色	圓軸ナダ
49回-8	148	第 3 潟	酒器	壺	口 径 11.9cm 高 3.8cm	密	良好	内、外ともに灰灰色	圓軸へラ削り、圓軸ナダ、 静止ナダ
49回-9	148	第 2 潟	酒器	壺	口 径 9.0cm 高 4.2cm	密	良好	内側灰白色、外側たちあがり 灰白色、綠灰色(輸付層)	圓軸へラ削り、圓軸ナダ、 静止ナダ
49回-10	148		酒器	壺	口 径 9.8cm 高 3.0cm	密	良好	内、外ともに灰白色	圓軸ナダ、ナダ
49回-11	148	第 2 潟	酒器	壺	口 径 12.4cm 高 5.6cm	密	やや 良好	内、外ともに灰白色	圓軸へラ削り、玉軸ナダ、 静止ナダ
49回-12	148	第 2 潟	酒器	壺	口 径 10.6cm 高 3.1cm	やや密	良好	内、外ともに灰灰色	圓軸へラ削り、圓軸ナダ、 ナダ
49回-13	148	第 2 潟	酒器	壺	口 径 10.5cm 高 2.4cm	密	良好	内側灰白色、外側青灰色	玉軸ナダ、静止ナダ
49回-14	148		酒器	壺	口 径 11.4cm 高 3.8cm	密	良好	内、外ともに灰灰色	圓軸ナダ、静止ナダ
49回-15	148	第 2 潟	酒器	高台付壺	口 径 11.6cm 高 6.0cm	密	やや 良好	内、外ともに灰灰色	圓軸ナダ、静止ナダ
49回-16	147	第 2 潟	酒器	高台付壺	口 径 5.7cm 高 4.2cm	やや密	良好	内、外ともに灰灰色	圓軸ナダ、静止ナダ
49回-17	148	第 2 潟	酒器	高台付壺	口 径 16.8cm 高 5.3cm	中密	良好	内側灰白色、外側灰褐色	圓軸ナダ、静止ナダ
49回-18	148	第 2 潟	酒器	高台付壺	口 径 16.6cm 高 8.4cm	密	良好	内側灰白色、外側空灰色	玉軸ナダ、静止ナダ
49回-19	148	第 3 潟	酒器	壺	口 径 12.4cm 高 4.3cm	やや密	良好	内側灰白色、外側灰褐色(一 部黒色)	圓軸ナダ、静止ナダ
49回-20	148		酒器	壺	口 径 16.9cm 高 5.7cm	やや粗	良好	内、外ともに暗灰褐色	圓軸ナダ、静止ナダ
49回-21	147	第 1 潟	酒器	壺	口 径 12.6cm 高 7.5cm	密	良好	内側黃白色、外側難褐色	圓軸ナダ
49回-22	147	第 4 潟	酒器	壺	最大径 23.8cm 高 5.9cm 底 21.4cm	密	良好	内側灰白色、外側暗灰褐色(上 面に向日葵絵)	圓軸ナダ
52回-3	150		土器等	分類 等級	長さ 6.6cm				

大原遺跡玉未製品觀察表

測量番号	写真記號	出土地點	種類	材質	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)
6回-1	121	第3層	管玉	碧玉	3.1		1.7
6回-2	121	第3層	管玉	碧玉	3.1		1.1
6回-3	121	第3層	管玉	碧玉	2.8		1.1
6回-4	121	第2層	管玉	碧玉	2.4		0.7
7回-1	121	床面	幻玉	滑石	5.15	3.2	2.0
7回-2	121	第3層	幻玉	碧玉	3.3	2.5	1.5
7回-3	121	床面	幻玉	碧玉	3.1	2.2	1.2
7回-4	121	第3層	幻玉	小瑪瑙	3.6	2.1	1.0
7回-5	121	床面	幻玉	滑石	1.75	0.8	0.7
7回-6	121	第2層	幻玉	碧玉	1.8	0.9	0.6
7回-7	121	第3層	幻玉	滑石	2.15	0.8	0.6
7回-8	121	第3層	幻玉	滑石	1.8	1.6	0.4
7回-9	121	第3層	幻玉	滑石	1.5	1.4	0.3
7回-10	121	第3層	幻玉	滑石	1.4	0.7	0.2
7回-11	121	第3層	幻玉	滑石	1.2	0.9	0.25
7回-12	121	第3層	幻玉	滑石	0.9	0.6	0.25
7回-13	121	第3層	幻玉	滑石	0.9	0.7	0.35
8回-1	121	第2層	紙石		6.7	4.7	1.6
8回-2	121	第1層	紙石		6.9	3.2	2.9
8回-3	121	第1層	紙石		7.6	1.8	1.1
13回-1	123	第2層	管玉	碧玉	4.5	2.3	1.0
13回-2	123	ピット内	管玉	碧玉	2.6		1.2
13回-3	123	第1層	管玉	碧玉	2.4		1.15
13回-4	123	第2層	管玉	碧玉	2.6		1.25
13回-5	123	第2層	管玉	碧玉	3.4	1.4	1.3
13回-6	123	ピット内	管玉	碧玉	1.9		0.9
13回-7	123	床面	管玉	碧玉	2.7		1.0
13回-8	123	第2層	管玉	碧玉	1.5		0.5
13回-9	123	床面	管玉	碧玉	3.2		0.6
13回-10	123	床面	管玉	碧玉	3.7		0.7
13回-11	123	第2層	管玉	碧玉	2.2		0.7
13回-12	123	第1層	管玉	碧玉	6.9		0.8
14回-1	123	第2層	幻玉	碧玉	3.3	2.7	2.4
14回-2	123	第2層	幻玉	碧玉	3.5	2.5	1.7
14回-3	123	床面	幻玉	碧玉	3.35	2.1	1.1
14回-4	123	第2層	幻玉	碧玉	3.5	1.8	1.2
14回-5	123	第2層	幻玉	碧玉	3.5	2.0	0.9
14回-6	123	ピット内	幻玉	碧玉	3.5	2.0	1.3
14回-7	123	ピット内	幻玉	碧玉	2.6	1.4	1.2
14回-8	123	第2層	幻玉	碧玉	2.35	0.9	0.8
14回-9	123	第3層	幻玉	碧玉	2.6	0.7	0.8
14回-10	123	第3層	幻玉	碧玉	1.7		0.9
15回-1	123	第2層	碧玉	綠色玻璃	7.2	4.4	0.8
15回-2	123	第2層	紙石		8.15	2.45	0.95
15回-3	123	第2層	紙石	綠色木	5.2	2.3	0.95
16回-1	149	第1層	管玉	碧玉	6.3	1.4	1.5
16回-2	149	第2層	管玉	碧玉	3.1	1.2	1.2
16回-3	149	第3層	管玉	碧玉	2.8	1.4	1.3
16回-4	149	第3層	管玉	碧玉	3.6	1.3	1.2
16回-5	149	第2層	管玉	碧玉	2.2		0.65
16回-6	149	第3層	管玉	碧玉	2.8		0.7
16回-7	149	第3層	管玉	碧玉	2.6		0.6
16回-8	149	第1層	管玉	碧玉	2.03		0.7
16回-9	149	第3層	管玉	碧玉	2.8	0.75	0.3
16回-10	149	第2層	幻玉	碧玉	4.1	2.4	1.9

半圓番号	半圓回数	出土地点	特徴	材質	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)
51回-11	149	第2層	丸玉	銅環	4.6	2.8	1.4
51回-1	149	水用	丸玉	銅玉	3.4	2.0	1.2
51回-2	149	第3層	丸玉	銅玉	3.9	2.3	1.2
51回-3	149	第2層	丸玉	銅環	2.7	1.9	0.9
51回-4	149	第2～3層	丸玉	銅玉	2.5	1.3	1.0
51回-5	149	第2～3層	丸玉	銅玉	2.45	1.6	0.9
51回-6	149	第3層	丸玉	銅環	2.55	1.4	0.75
51回-7	149	第3層	丸玉	銅環	2.5	1.3	0.8
51回-8	149	第2層	丸玉	銅玉	3.3	2.0	1.1
51回-9	149	第2層	丸玉	銅玉	2.3	1.8	1.1
51回-10	149	第3層	丸玉	銅玉	2.1	1.5	0.9
51回-11	149	第2層	丸玉	銅玉	1.4		1.3
51回-12	149	第3層	有孔円盤	銅玉	3.9	3.85	0.9
52回-1	150	最下層	原石	砂利	26.0		10.0
52回-2	150	最下層	原石	高麗石	19.8	16.1	13.8

### 大原遺跡鉄製品観察表

探査番号	号A回数	種類	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	備考
38回-1	134	大刀	69.4	3.2	1.2	全体的に木質が残る
38回-2	134	刀子	11.9	1.1		木質が残る
38回-3	134	刀子	6.4	0.9		
38回-4	134	鎌	4.5	0.5	0.3	
38回-5	134	鎌	3.1	0.7	0.55	木質が残る
38回-6	134	鎌	4.0	0.65	0.25	
38回-7	134	鎌	3.6	0.6	0.5	
38回-8	134	鎌	5.1	0.65	0.5	
38回-9	134	鎌	3.3	0.65	0.3	
38回-10	134	鎌	4.65	0.65	0.6	
38回-11	134	鎌	7.1	0.8	0.55	
38回-12	134	鎌	6.3	0.8	0.5	
38回-13	134	鎌	6.2	0.65	0.55	
38回-14	134	鎌	6.0	0.7	0.3	
38回-15	134	鎌	3.1	2.7	0.55	
38回-16	134	鎌	4.5	2.9	0.3	
38回-17	134	耳環	長径 2.1	留送 1.9		金の残りが大変良い
38回-18	134	耳環	長径 2.2	留送 1.9		金管を折り曲げている
38回-1	150	鏡片	既存長3.9	1.7	0.3	割れ口を磨いている

## VI 自然科学的分析



## 安来市臼コクリ遺跡より検出された人骨について

鳥取大学医学部解剖学第二講座 井 上 貴 央

### 1. はじめに

本稿は、安来市臼コクリ遺跡の横穴群より検出された人骨に関する報告である。今回調査された横穴群の中でも、S-2号横穴はその中に石棺を有する立派なものであり、被埋葬者の人物像を検出人骨から特定することができれば、横穴墓の性格を考えるうえでも重要な手がかりになると考えられたが、被埋葬者について得られた情報は少ない。他の人骨が検出された横穴墓についても、骨から得られた情報はきわめて少ないと、検出人骨の概略を報告したい。

### 2. 検出人骨の記載

#### N-1号横穴

玄室の入口からみて左半側には土器屍床があって、横穴検出時には天井から崩落した土で被われていた。このため、骨の検出は少なく、また風化が著しいため、埋葬肢位や被埋葬者の特徴について言及することはむつかしい。骨は、玄室入口からみて左半側から検出されており、右半側からは検出されていない。しかし、これには検出のエラーも考えられ、埋葬遺体が右半側になかったとは断定できない。

骨は総計で11点検出されているが、ほとんどが同定にたえない。頭蓋骨では左右の頭頂骨の一部が検出されている。この矢状縫合をみると、内板外板とともに癒合が未閉鎖であり、仕年のものであることは確かであるが、性別は特定できない。上顎骨が1点検出されているが、乳歯を伴っており、その歯式は次のとおりであるが、左右の大歯、第1小臼歯は未萌出である。

P <sub>1</sub> C					CP <sub>1</sub>	
M <sub>2</sub>	M <sub>1</sub>	脱	I <sub>2</sub>	I <sub>1</sub>	I <sub>1</sub>	I <sub>2</sub>
<hr/>						

永久歯は咬耗が進んでいないが(Martin 0度)、乳臼歯は歯冠全体にわたって象牙質が露出しており、固い食物をとっていたことが窺われる。歯牙の萌出状況からすると、この上顎骨は9~11才の

ものと推定される。その他に遺物整理中に9点の歯牙が検出されている。四肢骨で同定したものは、頭骨片（1点）、橈骨片（1点）、尺骨片（1点）にすぎない。

本横穴には、少なくとも壮年の成人（性別不明）が1体と幼年者（9～11才）が1体埋葬されていたものと考えられる。

#### N-2号横穴

玄室内は全面にわたって土器屍床が敷きつめられており、人骨は主に屍床上より検出されている。しかし、屍床の下からも人骨が10数点検出されており、土器屍床が敷かれる以前にも本横穴は利用されていた可能性がある。

検出入骨は無秩序に散布しており、遺体の骨は大きく動かされている。頭蓋骨は、玄室左側より2点検出されている。このうち、ひとつは左側頭骨から頭頂骨にかけてのものであり、もうひとつは右側頸骨から後頭骨にかけての部分である。前者においては、乳様突起は中等度に発達しているが、全体的に小さく、女性骨を窺わせる。後者においては、乳様突起の発達具合は不明であるが、後頭骨に認められる頃面のレリーフは粗造ではなく、外後頭隆起の発達も弱いことから女性骨であると思われる。両者の側頭骨の全体の形態を比較すると、別個体のものと考えられ、本横穴からは少なくとも2個体の女性の頭蓋骨が検出されたことになる。

四肢骨では、成人の上腕骨が1点、大腿骨が7点、頭骨が5点検出されているが、保存状況が悪く、左右を確認できないものが大部分であり、骨最大長が測定できないため、身長の推定も不可能である。しかしながら、大靭骨が7点検出されていることからして少なくとも4体の埋葬があったものと推定される。

本横穴には少なくとも成人4体が埋葬されていたことは確実であり、そのうち2体は女性骨であると推定される。

#### S-1号横穴

1本の大腿骨が検出されたのみである。成人の大腿骨にまちがいはないが、左右の別、性別を特定することはできない。したがって、本横穴には少なくとも1体の成人の埋葬があったことは確実である。

#### S-2号横穴

羨道からみて玄室の左側には蓋付き石棺があり、右側には、奥方と入口近くの2ヶ所から数多くの須恵器が検出されている。骨は奥方の須恵器の近くと石棺内の大きく2ヶ所から検出されている

が、本論ではこれを石棺外人骨と石棺内人骨の2つの群に分けて骨の記載をおこなうことにする。

### 1) 石棺外人骨

骨の検出時には、天井の崩落はごくわずかしか認められず、骨は床面にあらわれていたが、骨の風化はかなり進んでおり、保存処理すらできないものが多い。また、骨配はバラバラに無秩序に検出されており、原位置を保ってはいない。

頭蓋骨は右上顎骨の一部が検出されているのみである。この上顎骨には歯牙は釘植していないが、近傍から上顎歯牙が7点検出されている。咬耗はあまり進んでおらず、Martin 1～2度である。肩甲骨の一部が検出されているが、上肢骨と断定できる骨は残念ながら検出されていない。大腿骨では右側の遠位関節部が2点検出されており、1点は大きさからみて男性のものである。またもう1点は子供～女性を窺わせる。左側大腿骨は、近位から骨体部にかけての部分が1点、これと接続しない遠位端が2点検出されている。この遠位端はいずれも大きくて頑丈であり、男性骨を窺わせる。その他左右不明の大腿骨が2点検出されている。頭骨では右側左側がそれぞれ2点検出されている。骨の保存状況が悪いために、大腿骨、頭骨とともに同一個体の骨を識別することはできない。足根骨は左右各1点検出されており、これは同一個体のもので男性のものである。

棺外人骨で被埋葬者を推定するには大脳骨が有効である。左右別の検出個数から判断して、少なくとも3体の埋葬があったものと考えられ、このうち2体は男性、1体は子供～女性であった可能性が高い。棺外から検出された歯牙は、咬耗度から判断して壮年のものであるが、男女いずれのものであるか判断しにくい。

### 2) 石棺内人骨

石棺の玄室入口側と奥側から骨が検出されている。石棺は蓋で密封されており、土砂や水の流入痕は認められなかったが、骨は著しく風化しており、原形を保ったまま取り上げができなかった骨も多い。石棺の入口側寄りからは、頭蓋骨片、大腿骨（遠位部）、頸骨片（近位部）、距骨片、橈骨片が検出されている。いずれも左右の別、性別を同定することはできないが、成人のものであることは確かである。石棺の中央からは、頭骨と思われる骨片が1本検出されている。石棺の玄室奥壁寄りからは、頭蓋骨片、歯牙片、肩甲骨片の他に、上腕骨片、大腿骨片（近位部）、脛骨片（近位部）、腰椎の椎体部分が検出されている。検出された歯牙の咬耗はあまり進んでおらず（Martin 0～1度）、被埋葬者の年令は壮年であった可能性が強い。本石棺中に埋葬されていた人骨は、頭蓋骨片が石棺の両端から検出されていることと、この頭蓋骨片の総量は1体分よりは多いことから考えて、少なくとも2体の埋葬があったものと推察される。骨の保存状況がきわめて悪いため、性別の識別

は不可能であったが、1体の年令は壮年であると考えられる。なお、本横穴の人骨にまじって、ネズミのものと思われる長管骨が検出されている。骨表面は風化が著しく、ネズミの咬痕は確認できなかったが、本石棺内の人骨はネズミによって著しく損なわれた可能性は否定できない。

本石棺内には少なくとも2体の成人の埋葬があったものと考えられる。そのうちの1体の年令は壮年である。性別は確定することができなかった。

#### S-4号横穴

玄室入口からみて玄室内の左右に屍床の高まりが認められるが、ここからは人骨はほとんど検出されておらず、骨は主に葬道の延長上にあたる屍床より少し低いところから検出されている。骨は他の横穴と比べて比較的よく保存されているが、完形な骨は検出されていない。四肢骨のなかには、同一個体の左右の骨と同定できた骨もある。しかし、その分布は埋葬時の肢位を保っているとは考えられず、骨は大きく動かされていることはまちがいない。

頭蓋骨は脳頭蓋の部分、前頭部～鼻根の部分、下顎骨の3点が検出されている。このうち、前頭部～鼻根にかけての骨は小さいものであるが、眉弓隆起が比較的よく発達しており、男性のものであることを窺わせる。下顎骨は関節頭と筋突起を欠くが、ほぼ完形である。オトガイの突出はやや著明で、下顎体は重厚な感じを与え、この下顎骨は男性のものであることが窺える。歯式は以下の通りであるが、歯牙の咬耗はかなり進んでおり、Martin 3-4度である。右第2小臼歯から第3大臼歯にかけては歯牙が脱落しており、歯槽辺に骨の吸収と増生が認められ、歯槽膿漏に罹患していたことが窺われる。

—歯槽吸収—				脱	脱	脱	脱	脱	C	P <sub>1</sub>	P <sub>2</sub>	M <sub>1</sub>	M <sub>2</sub>	脱
--------	--	--	--	---	---	---	---	---	---	----------------	----------------	----------------	----------------	---

上顎骨では、同一個体の上腕骨が1組と左上腕骨が1点、同一個体の尺骨が1組検出されている。下顎骨では、同一個体の大龍骨が2組と左右の成人の大腿骨がそれぞれ1点、幼年者の右大腿骨が1点検出されている。また、脛骨では同一個体のものと考えられる骨が1組検出されている。その他にも四肢骨は多数検出されているが、骨片状のものが多く、部位を特定できないものが多い。

本横穴の被埋葬者の個体数を考えるには、検出個数の最も多い大龍骨による判定が有効である。その数から判断して、少なくとも成人3体、子供1体の埋葬があったとみるのが妥当であろう。ま

たその形状から判断して、成人3体のうち2体は男性、1体は女性と推定される。

本横穴より検出された大部分の骨には、ネズミによると思われる明瞭な咬痕が認められた。このことは、本横穴の閉塞がある時期に完全なものではなかったことを示すものであり、ネズミ類の玄室内侵人によって骨が散乱状態になったことを窺わせる所見である。

### 3. おわりに

以上、本横穴墓より検出された人骨について述べた。骨の風化が著しいために骨は大きく損なわれており、的確な性別・年令構成や身長推定ができなかったことは残念である。稿を終わるにあたり、本人骨の調査の機会を与えられた島根県教育庁文化課の各位に厚く御礼申し上げる。

## 島根県安来市大原 1 号横穴出土の耳環の材質と構造

奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター 村上 隆  
研究指導部主任研究官

大原 1 号横穴から出土した一对の耳環のうち、一つは完形であったが、もう一つはちょうど真ん中あたりで割れていた。共に断面の形状は梢円形、内部は中実で、表面は金色に仕上げられている。両方の耳環の現在の状態での大きさと重さを表 1 に示した。

割れている方の耳環の割れ口や耳挟み部の状態から、耳環の内部構造や製作技法を探ることを試みた。主に用いた装置は、非破壊的手法により材質を探る蛍光 X 線分析装置と、表面の微細構造を探る電子顕微鏡である。<sup>(註 1)</sup>

この結果、耳環の芯は今ではまったく錫びて緑色に変化しているが、当初は銅であったと推定される。ここで問題になるのは、銅芯の表面をどうやって金で覆ったのであろうか、という点である。写真 1 は耳挟み部の光学顕微鏡観察である。銅芯本体は梢円形をしており、銅芯本体を薄い金の箔で包み、端で余った分を折り込んで耳挟み部を成しているとみられる。金箔は耳挟み部の端面全体を覆うまでには至らず、端面の中央部は銅の地金のままであったのではないかと考えられる。写真 2 は割れ口の表面で浮き上がった金箔の様子である。耳挟み部を電子顕微鏡で観察すると、確かに金箔を折り込んだ際の痕跡が認められる(写真 3 (a)、(b))<sup>(註 2)</sup>。また、割れ口で浮き上がった金箔の断面を詳細に調べていくと、二重に重なったとみられる部分を見いだすことができた(写真 4)。因に、金箔の厚さは全体で数ミクロン程度と考えられる。金の純度は高いようである。

もし、水銀を用いた金アマルガム法による鍍金によって表面の金層が形成されているならば、一般には水銀が検出されるが、この耳環の分析では水銀が検出されない。また、金アマルガム粒子の存在も認められない。これも金箔が用いられたことを裏付ける証左のひとつであろう。

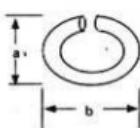
以上、島根県安来市大原 1 号横穴で出土した一对の耳環の調査から、銅芯に金箔を巻いた耳環の構造を明らかにすることができた。

(註 1) 全資料型非破壊蛍光 X 線分析装置 リガク㈱製 3371C

(註 2) 走査型電子顕微鏡 日本電子㈱製 JXA840

(註 3) 耳環の耳挟み部の状態から、耳環の実際の装着性を論じる試みがなされている。菅谷文則「古墳時代の耳飾りについて」『古代国家の形成と展開』吉川弘文館 1976、村上 隆「高川古墳群出土の耳環の構造と材質について」『高川古墳群』兵庫県教育委員会 1991

(註 4) 数ミクロンの大きさの金アマルガム粒子の残存が、金アマルガムを用いた鍍金法の証左として考えられる。村上 隆「高川古墳群出土の耳環の構造と材質について」『高川古墳群』兵庫県教育委員会 1991、村上 隆・新山 栄「金アマルガム法による古代鍍金層の表面キャラクタリゼーション」『古文化財之科学』(投稿中)』



	1 (完形)	2 (割れている)
大きさ (mm)	1.92	1.92
厚さ (mm)	2.14	2.10
重さ (g)	8.0948	4.7835

表1：大原1号墳出土耳環の大きさと重さ

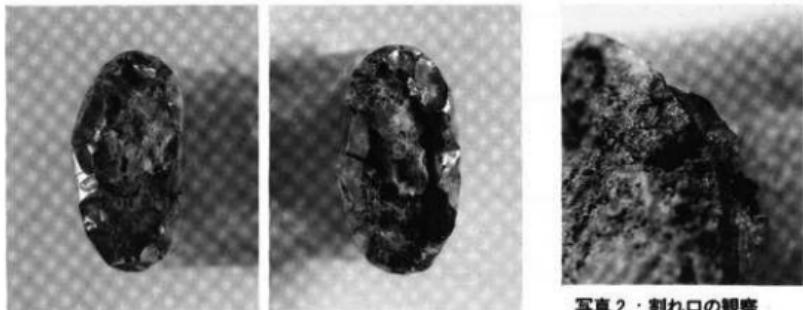
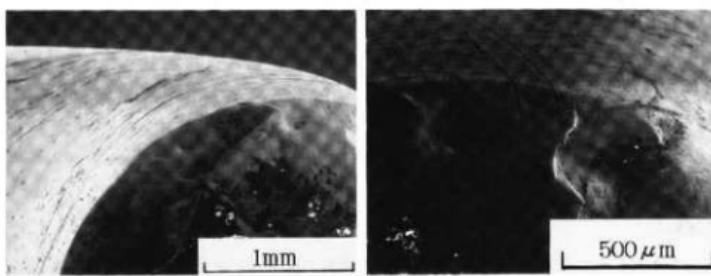


写真1：耳挿み部の観察（光学顕微鏡観察）  
(2つに割れているため、撮影が可能となった)

写真2：割れ口の観察  
(光学顕微鏡観察)



(a)

写真3：耳挿み部端面における金箔の観察  
(電子顕微鏡観察)

(b)



写真4：金箔の断面構造  
(電子顕微鏡観察)

# 安来市大原遺跡、白コクリ遺跡出土鉄滓の調査

和鋼博物館 佐 藤 豊

大原遺跡および白コクリ遺跡は安来市佐久保町に所在し、ともに国道9号線バイパス安来道路建設予定地内にあって、工事に先立つ事前発掘調査によって発見された。大原遺跡は5世紀前半の玉作工房跡といわれているが鉄滓ならびに炉壁は工房の床面および柱穴から出土した。白コクリ遺跡は7~8世紀代の住居跡埋土中から鉄滓が出土した。出土した鉄滓について島根県教育委員会から分析依頼を受け、その結果と若干の考察を行ったので併せて報告する。

## 1. 資 料

資料の明細および外観をそれぞれ表1および写真1~4に示す。

表1 資料の明細

No	名 称	明 細	重 量 (g)
No 1	大原S I -01第2層中 920921-10 鉄滓	幅約55mm、厚み約22mm、長さ約45mm、底面側は直径55mmの半円状の流出溝を流れた感じのもので表面やや黒色、緻密で重たい	110
No 2	大原G-15 表-1 921002 梶形滓	約85mm×約100mm、厚み約20mmの大きさのもので楕円形を形成している。表面はやや赤味を帯び凹凸状で緻密、重たい感じ	330
No 3	大原S B-07 (P 2) 921201 炉壁	骨材の混入が見える炉壁で、これに炉内面側は溶融物と激しく接触のため黒色ガラス状である。厚み約30mm、幅約55mm、長さ65mm	105
No 4	白コクリ出土鉄滓 D-1区南側斜面 911204	幅約40mm、長さ約40mm、厚み約15mmで表面黒色、やや平坦な場所を流れ出た感じの流出溝、緻密で重たい感じ	70

## 2. 化学組成

各資料から試料を採取し化学分析を行った。各資料の化学組成を表2に示す。

表2 各資料の化学組成

(重量%)

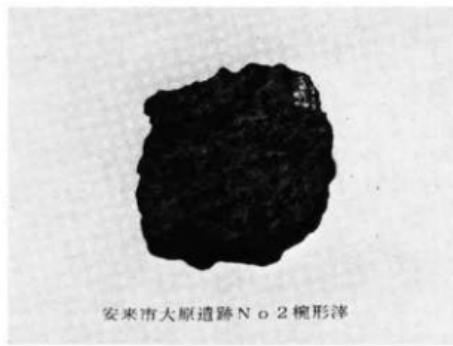
	C	SiO <sub>2</sub>	MnO	P	S	Ni	Cr <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	Na	K	CaO	MgO	V <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	TiO <sub>2</sub>	Cu	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	T-Fe	FeO	Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	M-Fe
No 1 大原S I -01	0.21	22.45	0.29	0.070	0.028	0.01	0.04	1.10	1.40	1.29	1.31	0.31	3.86	0.01	7.17	35.35	46.46	0.46	0.40
No 2 白コクリ 梶形滓	0.15	19.29	0.23	0.10	0.057	0.01	0.04	1.10	1.10	0.67	0.58	0.14	1.84	0.01	5.25	47.70	52.78	9.70	0.38
IV 大原S B-07	0.056	59.70	0.05	0.031	0.002	0.01	0.02	1.40	1.14	0.54	0.55	0.024	0.30	0.01	10.60	2.50	1.20	2.24	0.04
No 3 伊賀鐵器	0.025	56.60	0.06	0.10	0.002	0.01	0.03	1.10	1.40	1.04	0.88	0.038	0.49	0.01	18.26	4.96	3.16	3.50	0.04
No 4 白コクリD-1区 南側斜面	0.009	26.35	0.66	0.046	0.021	0.01	0.02	0.96	1.40	2.16	2.26	0.29	4.79	0.01	5.70	32.69	41.67	0.55	0.34

このうち炭素および硫黄は赤外線吸収法により、その他の元素は高周波誘導プラズマ発光分光分析装置 (ICP) により定量した。



安来市大原遺跡 N o 1 鉄滓

写真1 大原遺跡 S I -01 第2層中鉄滓の外観



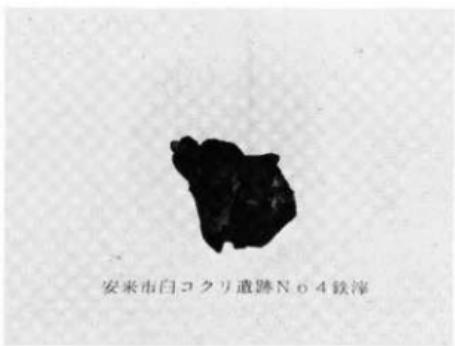
安来市大原遺跡 N o 2 楠形滓

写真2 大原遺跡 G -15 表鉄滓の外観



安来市大原遺跡N o. 3 炉壁

写真3 大原遺跡S B-07 炉壁の外観



安来市白コクリ遺跡N o. 4 鉄滓

写真4 白コクリ遺跡D区南側斜面鉄滓の外観

### 3. 顕微鏡組織

各資料の顕微鏡組織を写真5～7に示す。資料No.1はウルボスピニル( $Fe_2TiO_4$ )、ファイヤライト( $Fe_2SiO_4$ )の結晶が主体、資料No.2はヴスタイト( $FeO$ )、ファイヤライトの結晶が主体、資料No.4はウルボスピニル、ファイヤライトの結晶が主体である。

### 4. 構成相の解析

前項で観察した試料を用い走査型電子顕微鏡(SEM)による微細組織の観察ならびにEDX分析(エネルギー分散型X線分析)による局部的な定性分析を、また粉碎試料を用いてX線回折を行ない、構成結晶の同定を行なった。結果を写真8～13に示す。またこれらの結果を総括し、各資料の構成相を示すと表3のようになる。



写真5 No.1 大原S I -01鉄津 ( $\times 100$ )  
淡灰色の角形結晶はウルボスピニル  
淡灰色の棒状結晶はファイヤライト

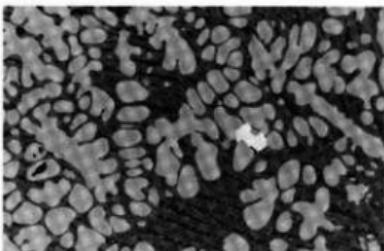


写真6 No.2 大原G -15焼形津 ( $\times 100$ )  
白色の小豆状結晶はヴスタイト  
淡灰色の棒状結晶はファイヤライト

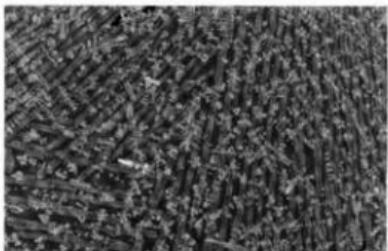
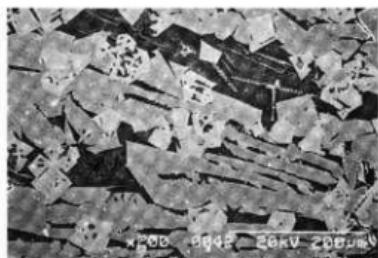
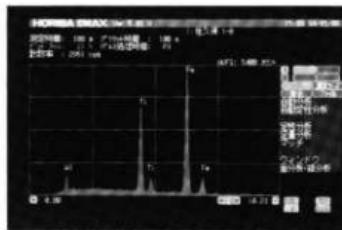
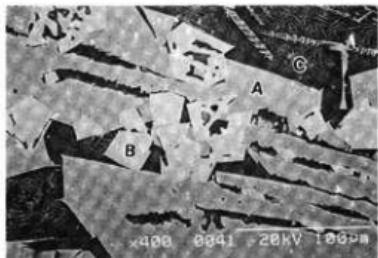


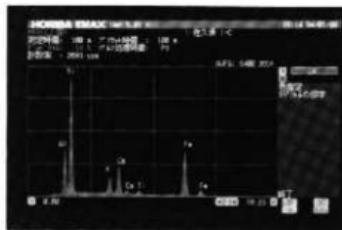
写真7 No.4 白コクリD区鉄津 ( $\times 100$ )  
白色の角形結晶はウルボスピニル  
淡灰色の棒状結晶はファイヤライト



A部 ファイヤライト



B部 ウルボスピニル



C部 基地

写真8 大原遺跡資料No.1のSEM像とEDX分析

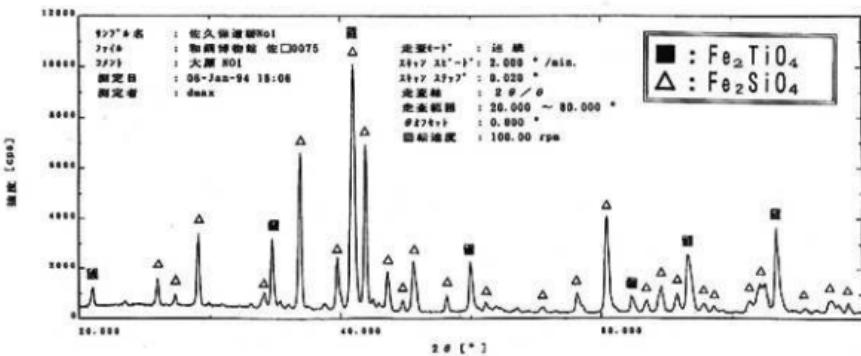
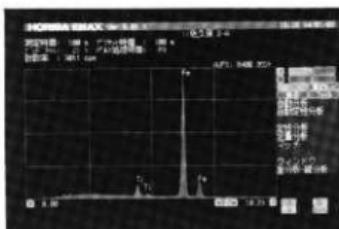
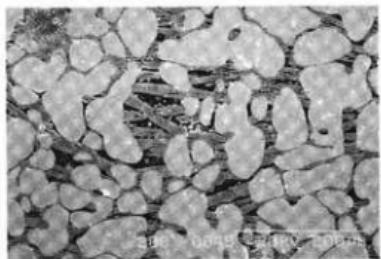
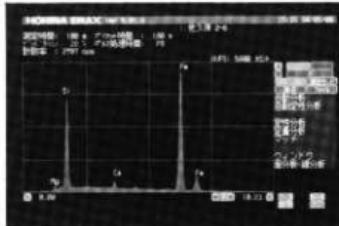
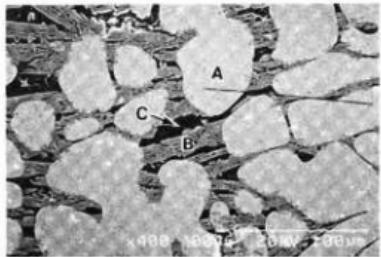


写真9 大原遺跡資料No.1のX線回折像



A部 ヴスタイト



B部 ファイヤライト



C部 基地

写真10 大原遺跡資料No.2のSEM像とEDX分析

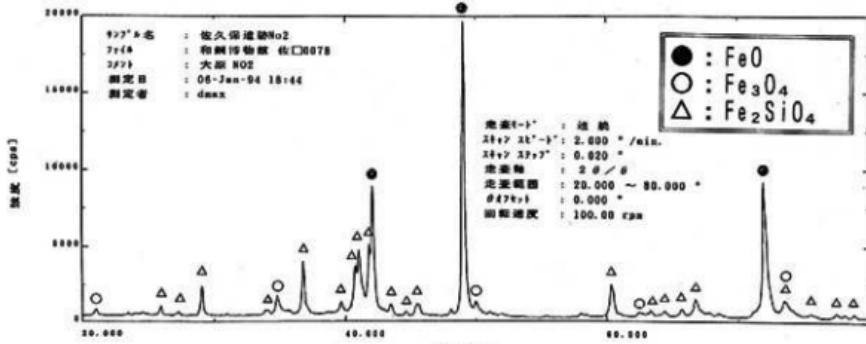
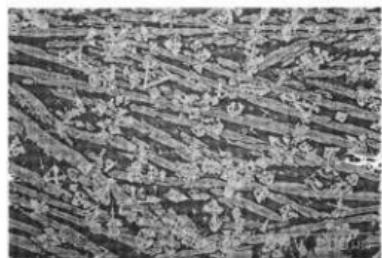
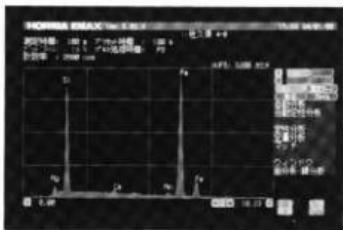


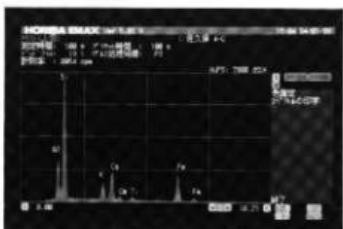
写真11 大原遺跡資料No.2のX線回折像



A部 ウルボスピニル



B部 ファイヤライト



C部 基地

写真12 白コクリ遺跡資料No.4のSEM像とEDX分析

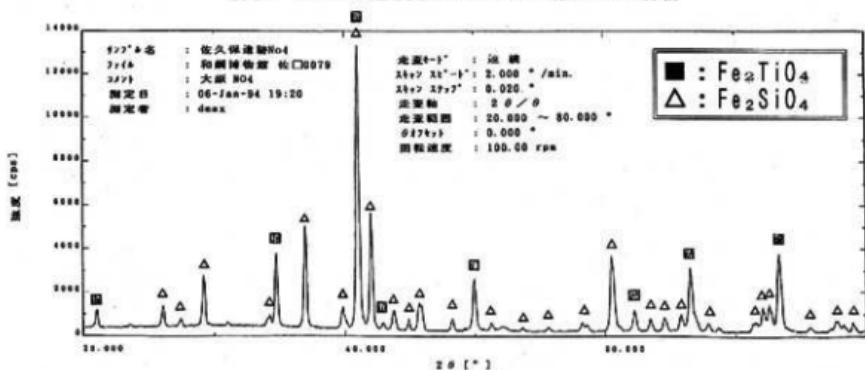


写真13 白コクリ遺跡資料No.4のX線回折像

表3 各資料の構成相

名 称	マグネサイト $\text{Fe}_3\text{O}_4$	ファイヤライト $\text{Fe}_2\text{SiO}_4$	ヴスタイト $\text{FeO}$	ウルボスピネル $\text{Fe}_2\text{TiO}_4$	基 地 (ガラス質)
No 1 大原S i -01鉄滓		◎		◎	Si-Al-Fe-Ca-Ti
No 2 大原G-15楕形滓	○	○	○		Si-Al-Fe-K-Ca-Ti
No 4 白コクリD-1区鉄滓		○		○	Si-Al-Ca-Fe-K-Ti

注: ◎ 多い、○ あり、△ 僅かにあり

## 5. 考 察

大沢正巳氏が調査された古墳出土鉄滓の化学組成、構成相に本鉄滓との比較を表4に示す。表4により、資料が製錬滓か鍛冶滓か、あるいは使用原料が砂鉄か鉱石（岩鉄）かについて考察してみる。

表4 各資料の化学組成および構成相の比較

名 称		化学組成 (重量%)				構 成 相
		造滓成分	$\text{TiO}_2$	V	$\text{T} \cdot \text{Fe}$	
製 錬 淪 (砂 鉄)	福岡地方	16.8 ~39.8	1.1 ~8.2	0.006 ~0.576	37.5 ~57.6	$\text{W} + \text{F}$ , $\text{W} + \text{M} + \text{F}$ , $\text{M} + \text{F}$
	岡山地方	17.1 ~25.9	5.03 ~19.8	0.02 ~0.18	32.1 ~41.8	$\text{M} + \text{F}$ , $\text{U} + \text{I} + \text{F}$
鉱 石 系 製 錬 淪		44.5 ~54.9	0.35 ~0.57	0.007 ~0.010	27.5 ~38.0	$\text{F} + \frac{\text{W}}{\text{M}}$ 微量
	福岡地方	21.0 ~33.5	0.22 ~0.9	0.009 ~0.167	49.1 ~55.6	$\text{W} + \text{F}$
鍛 冶 治 淪	岡山地方	21.4	5.6	0.12	51.7	$\text{W} + \text{M} + \text{F}$
	福岡地方	10.1 ~12.6	0.1 ~0.7	0.013 ~0.288	62.2 ~64.0	$\text{W} + \text{F}$
No 1 大原 S i -01鉄滓	岡山地方	7.52	0.06 ~0.19	0.06	50.1 ~64.0	$\text{W} + \text{F}$
	島根県 安来市	32.32	3.86	0.1736	35.39	$\text{U} + \text{F}$
No 2 大原 G-15 楕形滓	〃	25.71	1.84	0.0784	47.70	$\text{W} + \text{F}$
No 4 白コクリ D-1区鉄滓	〃	39.33	4.79	0.1624	32.69	$\text{U} + \text{F}$

注: 造滓成分 ( $\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO}$ )

W : Wustite, F : Fayalite, M : Magnetite, U : Ulvöspinel, I : Ilmenite

## (1) 資料No 1、No 4について

鉄分が32.69%~35.39%と低く、また $\text{TiO}_2$ 量3.86%~4.79%であることと、組織的にもファイヤライト+ウルボスピネルと製錬滓の特徴を示すことから、鍛冶滓ではなく製錬滓と判断される。また原料は $\text{TiO}_2$ の低い真砂砂鉄系の砂鉄を用いて操業が行なわれたものと推定される。次に從来調査した鉄滓の化学組成及び組織と本資料No 1、No 4鉄滓のそれらを比較し、技術レベルにつき検討を加

えてみる。まず各種鉄滓の $\text{SiO}_2$ 、 $\text{FeO}$ 、 $\text{TiO}_2$ を100%に換算した構成比と組織の関係を表5に示し、これをプロットしたのを図1に示す。図中大原、白コクリ鉄滓とも $\text{TiO}_2$ 低く、鍛押の砥波たら、靖国たらと同一レベルにあることがわかる。

表5 各種鉄滓の組成と組織の関係

番号	鉄滓資料名	組成構成比(%)				組織
		$\text{SiO}_2$	$\text{FeO}$	$\text{TiO}_2$	$\text{FeO}/\text{SiO}_2$	
No 1	大原S I -01第2層中鉄滓	31	64	5	2.06	U + F + G
No 2	白コクリD一区南側斜面鉄滓	38	56	6	1.47	U + F + G
3	備谷たら (鍛押) (2)	27	49	24	1.81	U + F + G
4	菅谷たらこもり (鍛押) (2)	37	50	13	1.35	U + F + G
5	菅谷たらら上り (鍛押) (2)	31	47	22	1.52	I + U + F + G
6	菅谷たらら下り (鍛押) (2)	33	43	24	1.30	I + U + F + G
7	砥波たらら (鍛押) (2)	32	58	10	1.81	U + F + G
8	靖国たらら (鍛押) (2)	30	66	4	2.20	U + W + M + F + G

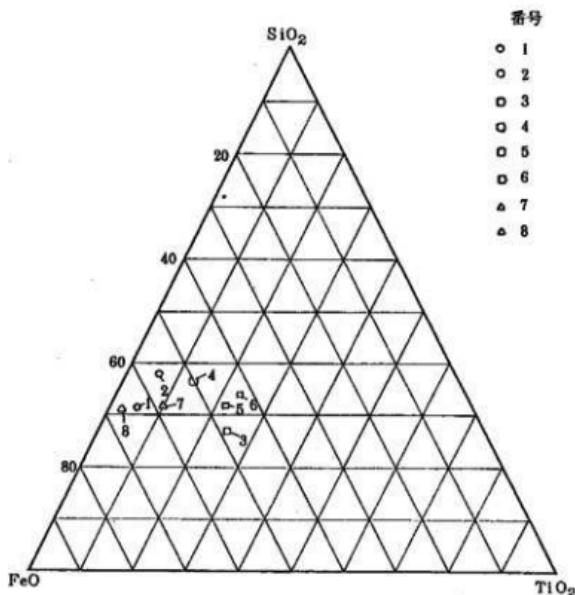


図1 組成と組織の関係

資料No.1 鉄滓はそれに鉄分が同一レベルに位置していることからTiO<sub>2</sub>の低い砂鉄を用いて銑押法的操業が行なわれていたものと推定される。また臼コクリ鉄滓は鉄分低く、FeO/SiO<sub>2</sub>比が銑押の菅谷たたらと同一レベルにあって、SiO<sub>2</sub>の溶け込みが大きいことから炉温も銑押に近く還元度の高い銑押的操業ではなかったかと思われる。

(2) 資料No.2について

鉄分47.70%と高く、また組織的にはヴスタイト+ファイアライトの鍛冶津的特徴を示していることと、外観形状が椀形を形成していることから鍛冶津と判断される。また鍛錬鍛冶津にしては鉄分低く、造滓成分多いことから精錬鍛冶津と推定される。またTiO<sub>2</sub>:1.84%、V:0.0784%は、砂鉄を原料とした精錬鍛冶津と判断される。

(3) 資料No.3 炉壁について

本炉壁材の化学組成と従来調査した釜土の組成比較を表6に示す。

表6 各種釜土の化学組成の比較

(重量%)

種類	SiO <sub>2</sub>	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	TiO <sub>2</sub>	CaO	MgO	T·Fe
大原SB-07炉壁粘土部 (A)	59.70	18.60	0.30	0.54	0.55	2.50
大原SB-07炉壁溶融部 (B)	59.60	18.26	0.49	1.04	0.88	4.96
磁波炉元釜土	65.59	18.63	—	0.23	Tr	3.37
石見国備谷炉元釜土	67.16	14.91	—	0.03	Tr	1.91
靖国たたら釜土	68.54	13.12	—	0.25	0.26	3.10
日本鉄鋼復元たたら釜土	64.44	13.60	—	0.20	0.38	2.83
島上作刀鍛錬場火床羽口取付粘土	54.28	19.10	0.89	1.17	1.33	4.62

組成的にみると、本炉壁は近代たたらよりSiO<sub>2</sub>低く、Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>はやや多目である。また炉内側溶融物(B)の鉄分含有量富化率をみると、4.96/2.50=1.984である。従来調査では島根県美保関町蔵ヶ峯炉壁の場合2.59、島根県屋根たたら炉壁では3.06、横田町下大仙子製鐵遺跡炉壁では2.37であることからすると若干富化率は低いけれど、島上作刀鍛錬場火床粘土よりSiO<sub>2</sub>高く、Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>およびT·Fe低く、粘土質が少ないことを示していることから本炉壁は製錬用に用いられたものと推定される。また、本炉壁の耐火度測定を株式会社三石ハイセラム工場で実施した結果を表7に示す。炉壁材の耐火度測定はデーターがなく、今後測定を重ねることによって充実して行きたい。

表7 耐火度測定結果

測定場所	株式会社三石ハイセラム工場 H 5年9月30日
試料名	資料No.3炉壁
耐火度	SK7 (1,230°C)
注	試料に鉄滓混入

## 6. 結 言

安来市佐久保町大原遺跡、白コクリ遺跡出土鉄滓について調査を行なった。結果を要約すると次の通りである。

- (1) 大原遺跡資料No 1 鉄滓はTiO<sub>2</sub>の低い砂鉄を原料に用いた製鍊滓と推定される。
- (2) 大原遺跡資料No 2 鉄滓は砂鉄を原料に用いた精錬銀冶滓と推定される。
- (3) 大原遺跡資料No 3 炉壁は鉄製錬に用いられた炉壁材と推定される。
- (4) 白コクリ遺跡資料No 4 鉄滓はTiO<sub>2</sub>の低い砂鉄を原料に還元度の高い操業での製鍊滓と推定される。

以上の調査は日立金属株式会社冶金研究所で実施し、日立金属テクノクス清永取締役に御指導を賜わった。

## 参考文献

1. 大沢正巳：古代出土鉄滓からみた古代製鉄、日本製鉄史論集119P（たたら研究会1984）
2. 清永欣吾：玉ノ宮一号たたら遺跡出土鉄滓の調査、平成元年4月20日
3. 和鋼記念館：庄原市則清遺跡出土鉄滓の調査、平成5年1月13日

## 白コクリ遺跡・大原遺跡

一般国道9号(安来道路)建設予定地内  
埋蔵文化財発掘調査報告書 V

(本文編)

1994年3月

編集・発行 建設省松江国道工事事務所  
島根県教育委員会  
印刷・製本 柏村印刷株式会社